八尾市文化財調査報告30
平成5年度公共事業

八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書II

1994. 3

八尾市教育委員会

はじめに

八尾市は奈良と大阪を隔てている生駒山系の高安山の西方に位置しており、古くは旧石器時代より人々の足跡が刻まれてきた土地であります。弥生時代から古墳時代にかけては、平野部には大きな集落を、山麓には群集墳が形成されました。また奈良時代には由義宮の所在地として『続日本紀』にも登場しています。

このような歴史の豊かな土地であるだけに開発事業に先立つ遺構確認調査は増加の一途を辿っております。近年、発掘調査の記事が新聞紙上を賑わすことが多くあります。しかし、その影には遺構確認の調査の積み重ねのあることも忘れることはできません。

本報告書は平成５年度の遺構確認調査をまとめたものであります。これらの成果によって八尾市の歴史をわずかでも垣間見ることができると思われます。それゆえにこの報告書が多くの人々に活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた方々、関係者各位に深く感謝いたします。

平成六年三月

八尾市教育委員会

教育長　西谷信次

例　　言

1．本書は、平成５年度に八尾市教育委員会が公共事業等に伴い、八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。

2．調査は八尾市教育委員会文化財課（課長　田中弘）が各事業主体に協力を求めて実施した。

3．調査は八尾市教育委員会文化財課の米田敏幸、渕斎、吉田野乃が担当し調査にあたった。

4．本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、特に成果のあった調査についてその概要を収録した。

5．現地調査、報告書の作成にあたっては、以下の諸氏の参加・協力を得た。

横山妙子、米原洋文、藤中貴子、松島賢治、横山典子、片山武志、堀本昌弘、安達志津子
福桝幹祐、清水妙香、竹中幸恵、島崎鋼一、濱谷百代

6．本書の作成にあたっては、渕、吉田が執筆・編集を行なった。

本文目次

1.跡部遺跡（９２－５４１）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
2.萱振遺跡（９３－２４１）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
3.小阪合遺跡（９３－４４３）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
4.小阪合遺跡（９３－４１３）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
5.東郷遺跡（９３－１９２）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
6.中田遺跡（９２－５９８）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
7.中田遺跡（９３－２８９）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３
8.中田遺跡（９２－３５５）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３３
9.西郡廃寺（９２－４１４）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３６
10.郡川遺跡（９３－３３６）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９

図版目次

図版１　中田遺跡（９２－５９８）　出土遺物

図版２　中田遺跡（９３－２８９）　出土遺物

図版３　中田遺跡（９３－２８９）　出土遺物

1、跡部遺跡（92-541）の調査

1.調　査　地　　春日町３丁目

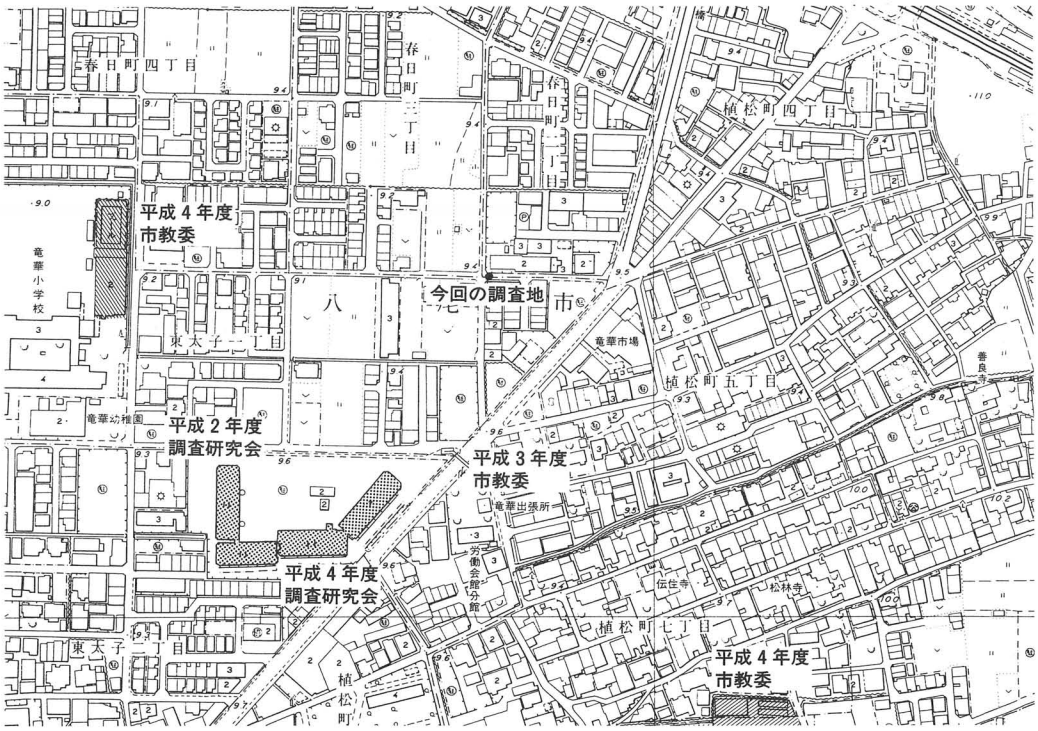
2.調査期間　　平成５年４月19日

3.調査契機　　公共下水道工事

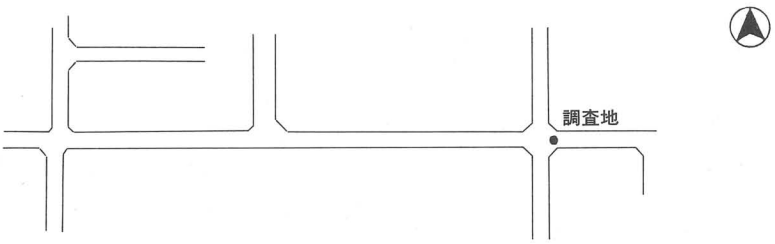
4.調査方法　　特殊人孔掘削に伴い、地表下3.5ｍ前後まで重機と人力を併用して掘削。

5.調査概要　　調査区では地表下2.3ｍ～3.3ｍ（ＴＰ7.8～6.6ｍ）で、弥生式土器を密に含む淡暗灰色砂混強粘土、灰色砂混粘土、暗灰色砂混粘土を確認した。この下には灰色斑緑灰色粘土層が堆積するが、この層では遺物は確認できなかった。また、この弥生土器を密に含む層の最も上層の淡暗灰色砂混強粘土層は北側でやや高まり、上端でＴＰ7.8ｍを測る。この弥生土器を含む層は土器の包含密度の高さ、層の厚さ等から大規模な遺構の可能性があるが、小調査のため、判然としない。

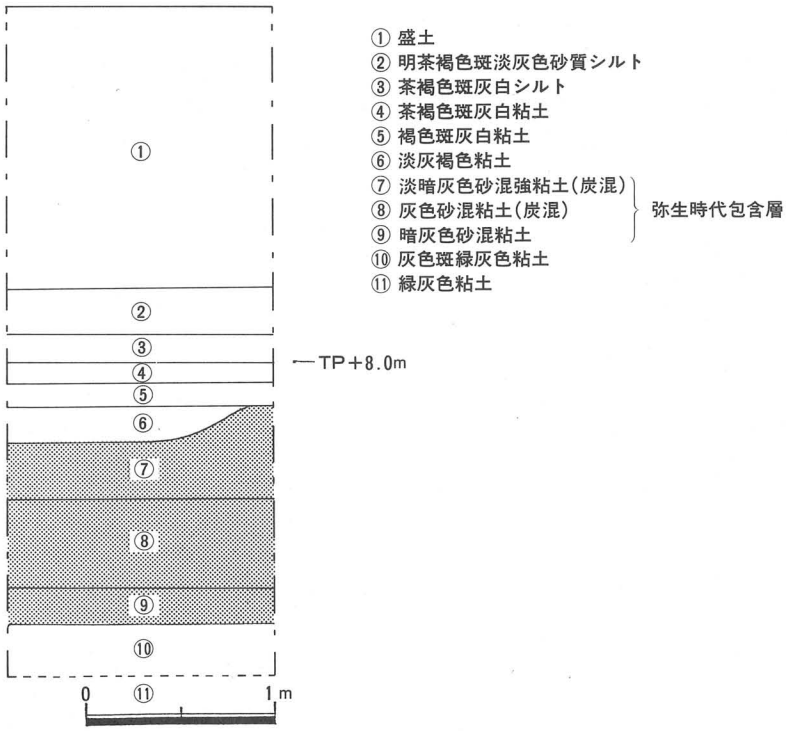
（吉田）



第1図　調査地周辺図（１／５０００）



第2図　調査区設定図



第３図　土層断面柱状図西壁（１／４０）

2、萱振遺跡（93-241）の調査

1.調　査　地　　桂町２丁目33、43、48-1、50-1

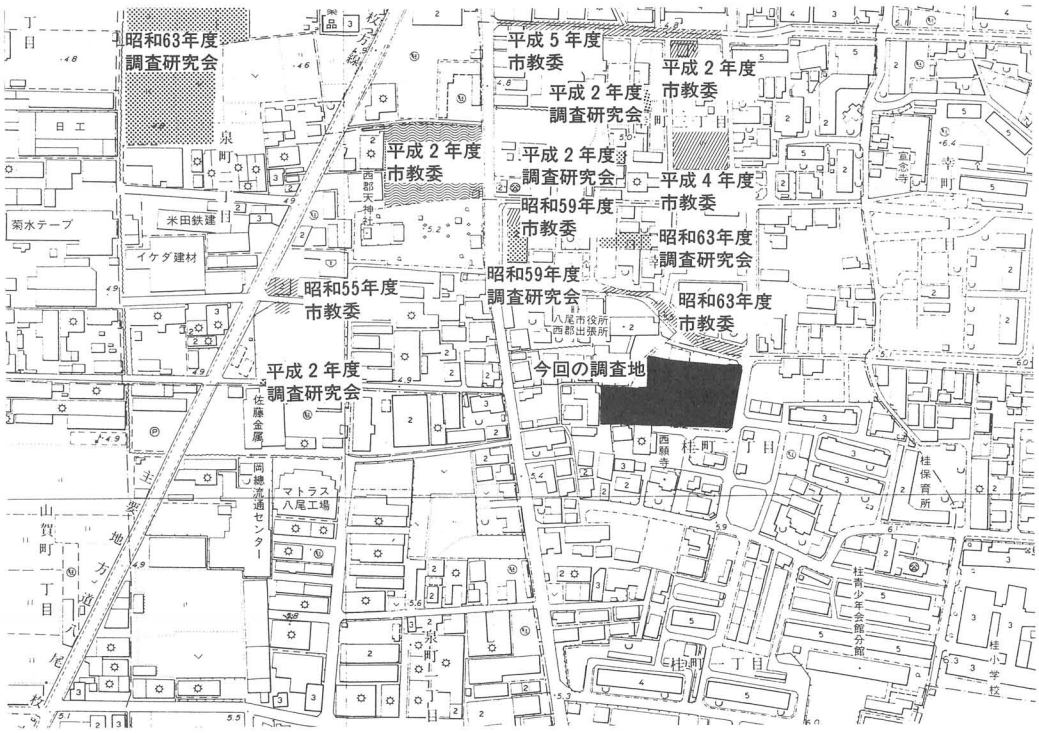
2.調査期間　　平成５年８月12、13、18、19日

3.調査契機　　西郡保育所建設

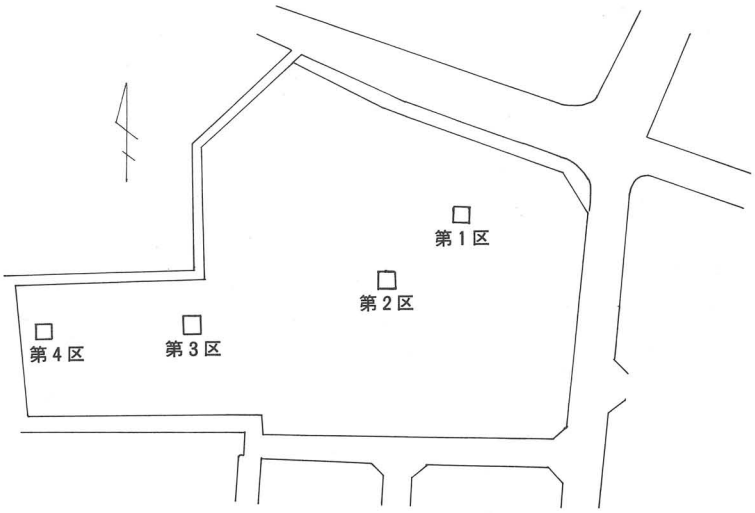
4.調査方法　　2.5ｍ×2.5ｍの調査区を４ヵ所設定し、各々約１ｍまで重機により掘削し、以下約２～2.5ｍまでを人力を併用して調査を行った。

5.基本層序　　第１区－ＧＬ－1.05ｍの淡緑灰色粘砂上面が近世の遺構面となる。この下部層である暗茶灰色砂混粘質土が古墳時代中期の包含層で、有段鉢、須恵器蓋杯などが出土している。またこの層上面より流路が切り込んでいるのが調査区の南半分で確認できた。ＧＬ－1.35～1.45ｍの暗黄灰色粘砂及び暗淡灰色粘質シルトでは弥生時代末期～庄内期の遺物が出土している。

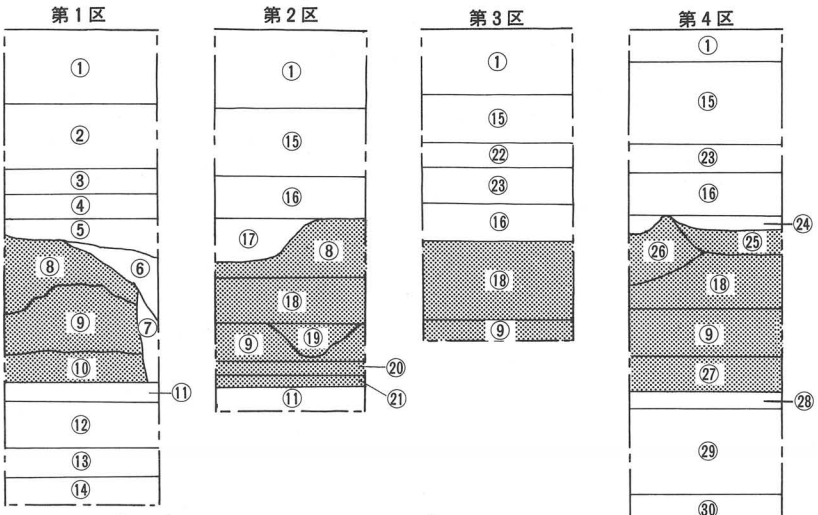
第２区－近世遺構面はＧＬ－１ｍの暗茶灰色砂質土で、このベース層がまた７世紀から８世紀にかけての遺物包含層になる。以下約1.8ｍまで遺物は出土しているが、ＧＬ－1.65ｍの暗灰茶色粘砂シルトは古墳時代中期の包含層



第4図　調査地周辺図（１／５０００）



第5図　調査区設定図（１／１０００）



① 表土
② 灰色粘土
③ 旧耕作土
④ 淡灰色細砂
⑤ 暗緑灰色粘砂
⑥ 灰色細砂
⑦ 暗黄灰色粘質シルト
⑧ 暗茶灰色粘砂
⑨ 暗黄灰色粘砂
⑩ 暗淡灰色粘質シルト
⑪ 暗青灰色シルト
⑫ 灰色粘土（植物遺体を含む）
⑬ 灰色微砂
⑭ 灰色粘質土
⑮ 淡褐灰色砂質土
⑯ 灰色粘砂
⑰ 灰茶色粘砂
⑱ 暗灰茶色粘砂
⑲ 暗灰色粘質土
⑳ 淡黄灰色小礫混砂質土
㉑ 黒灰色粗砂質土
㉒ 暗灰色茶斑混粘砂
㉓ 暗茶灰色粘質土
㉔ 暗灰褐色粘砂
㉕ 暗青茶灰色粘砂
㉖ 灰色砂礫
㉗ 暗褐色シルト
㉘ 茶褐色粘質シルト
㉙ 暗灰色粘土
㉚ 灰黒色粘土
㉛ 暗緑灰色粘土

第6図　基本層序模式図（１／４０）

である。

第３区－ＧＬ－0.93ｍの暗茶褐色粘質土で近世から中世の遺物がみられ、ＧＬ－1.15ｍから約0.43ｍの厚さで堆積している暗茶褐色粘砂とその下部層である茶褐色粘砂で弥生末から古墳後期にかけての遺物が出土している。

第４区－ＧＬ－1.1ｍ前後の暗青茶色砂混粘砂上面が中世遺構面となる。またＧＬ－1.5～1.6ｍの暗褐灰色砂混シルト上面が古墳時代初頭の遺構面となる。そしてＧＬ－1.9ｍ前後まで遺物の出土を確認することができた。

6.遺構・遺物

【近世】第１区と第２区で遺構を検出している。第１区は南北方向の溝で幅1.2ｍを測る。埋土は暗緑灰色粘砂と灰色細砂の２層に分けられ、遺物は上層より出土している。第２区では南東から北西に伸びる溝とピットを検出する。溝は最大幅0.7ｍ、深さ0.25ｍを測り、灰茶色粘砂を埋土とする。

【中世】第４区でのみ確認でき、東西方向の溝と土坑を検出した。溝は幅0.4ｍ、深さ0.15ｍを測る。埋土は暗茶灰色粘砂で土師質の釜（１）が出土している。土坑は長径0.95ｍ、短径0.75ｍを測る。（２・３）は第２区の茶灰色粘砂～暗褐色粘砂から出土した瓦器椀と擂鉢である。

【７～８世紀】第２区で包含層を確認し、（４）の須恵器杯Ｂが出土している。

【古墳時代中期】第２区でピットを検出している。第２区より（５）の須恵器杯身が出土。

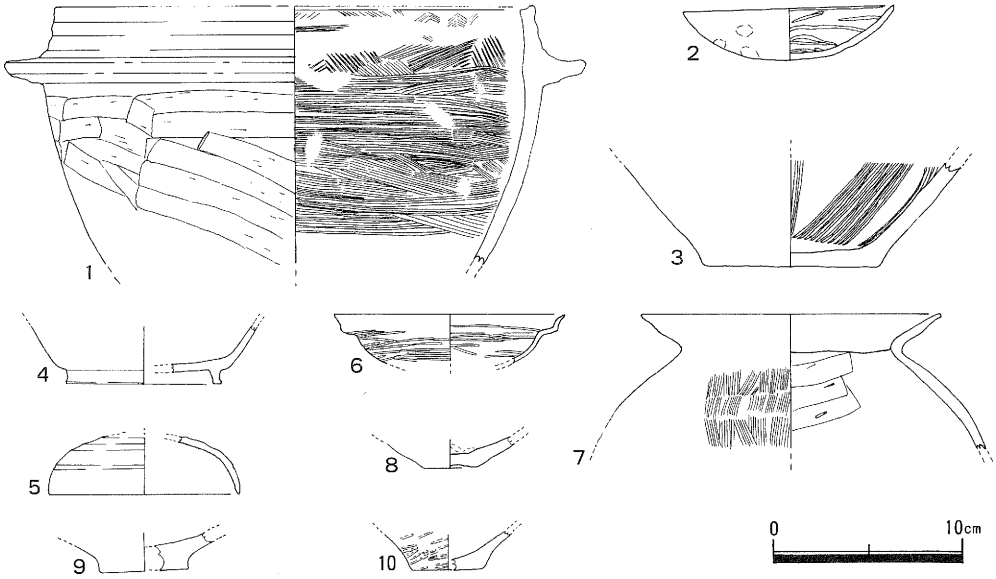
【庄内期～布留期】遺物は全調査区で出土しているが、遺構を検出できたのは第４区のみである。土坑１基、ピット２基と焼土を確認している。第４区では（８）の壺の底部が出土しており、（６・７・９）の小型有段鉢、甕、壺底部は第１区の暗淡灰色粘質シルト、暗茶灰色粘砂でそれぞれ出土している。

【弥生時代末期】全調査区で包含層を確認している。（10）は第４区で出土した甕底部である。

7.備　　考

本調査地の北側に面した道路部分において昭和61年度に当教育委員会は水道工事に伴う調査で弥生後期、庄内～布留期、平安時代の遺構、遺物を検出しており、今回の調査はそれらの南への拡がりを確認したものである。

（消）



第7図　出土遺物実測図（1／4）

3　小阪合遺跡（93-443）の調査

1.調　査　地　　山本町南７丁目73番地

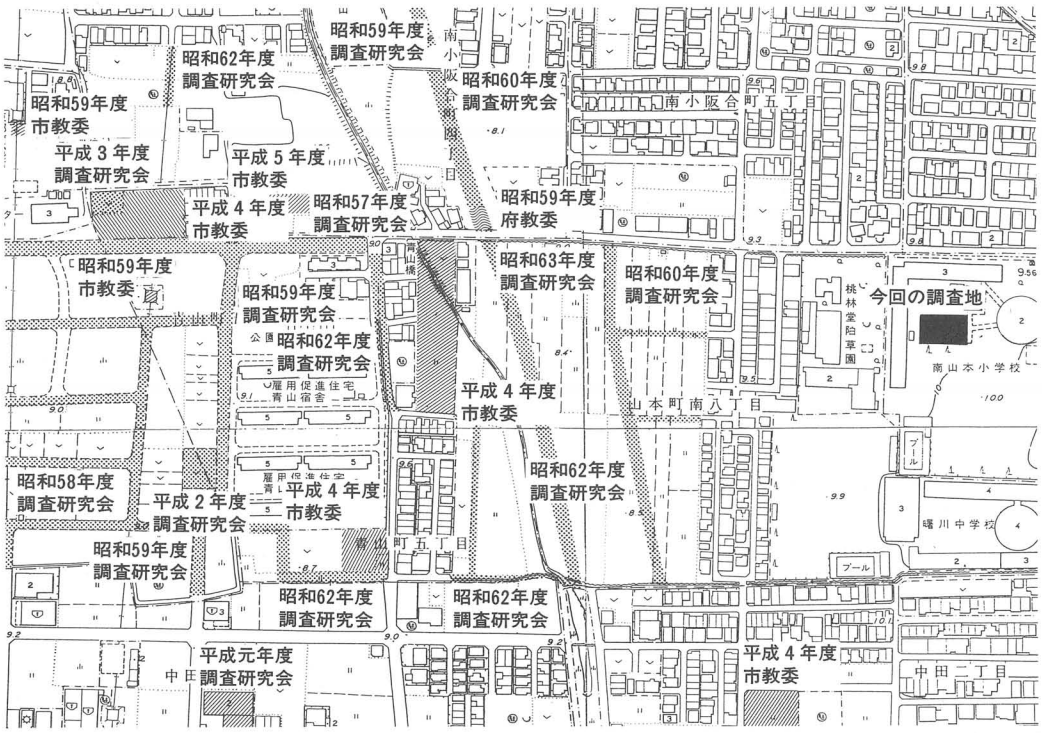
2.調 査 期 間　　平成５年８月26日

3.調 査 契 機　　南山本小学校屋内運動場建設

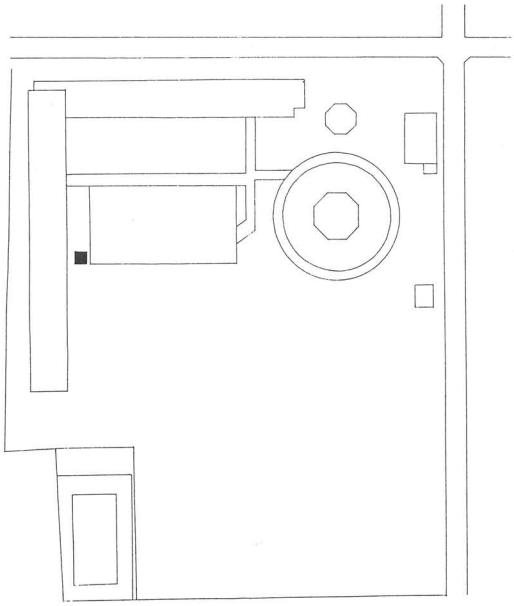
4.調 査 方 法　　現況はまだ既設建物が存在しているため、事業計画地の西側に2.8ｍ×3.5ｍの調査区を１カ所設定した。

5.基 本 層 序　　地表下1.3ｍの暗褐灰色粘土が中世の遺構面となり、この遺構面構築層及び下部層の暗灰色粘土層・暗灰色砂混粘土層において古墳時代初頭の遺物が出土しており、古墳時代の包含層になるとみられる。

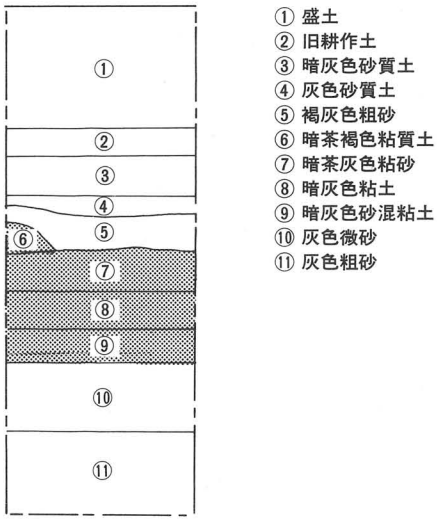
6.遺構・遺物　　地表下1.25～1.3ｍの暗褐灰色粘土上面で中世の水田面を検出した。水田面上では人や動物の足跡等もみられ、また調査区南端では幅0.44ｍ、高さ0.13ｍの東西方向の畦畔も確認している。畦畔は暗茶褐色砂混粘土で形成されている。この水田面上部層の褐灰色粗砂は洪水による堆積層とみられるが、この層中より須恵器・土師器片が見つかっている。水田面以下の包含層からは古



第8図　調査地周辺図（１／５０００）



第9図　調査区設定図（1／2500）



第10図　基本層序模式図（1／40）

式土師器が若干出土しているが、このうち僅かではあるが、庄内式土器が含まれていた。

7．備　　考

昭和63年度には当小学校の東北角の路上において行った下水道工事に伴う調査で地表下1.7 m付近で多くの古墳時代前期の遺物が出土している。今回の調査でも同時期の包含層が見つかっており、集落域が拡がるものと思われる。　　（渕）

4、小阪合遺跡（93－413）の調査

1.調　査　地　　青山町３丁目207

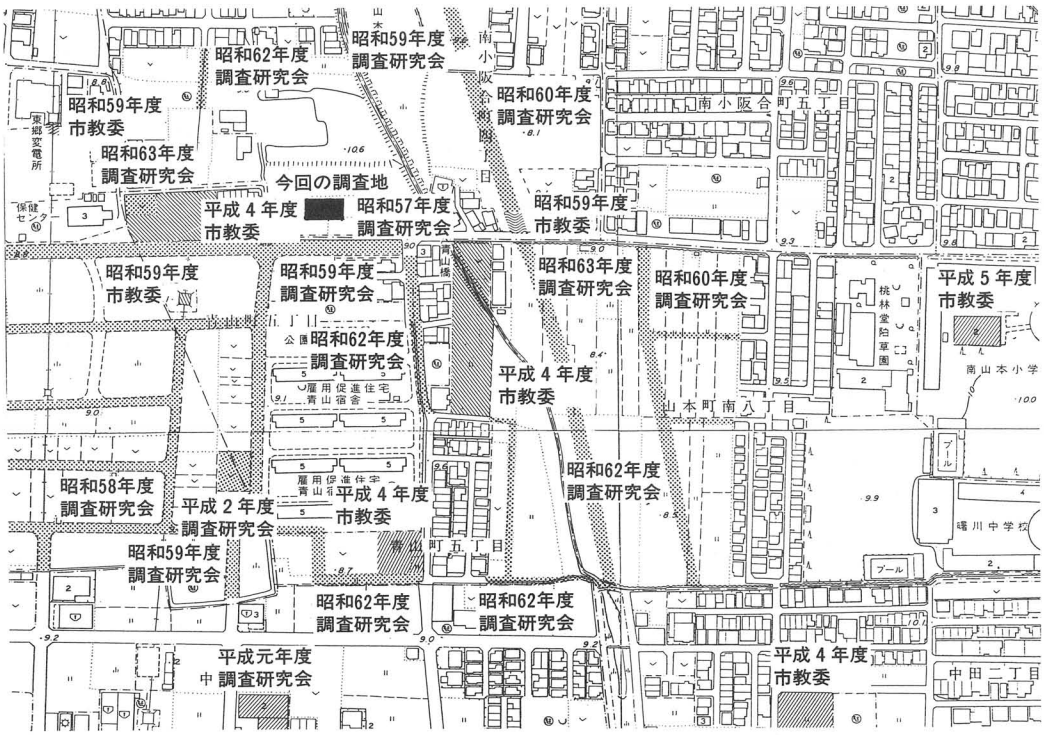
2.調査期間　　平成５年11月10・12日

3.調査契機　　市立総合体育館建設

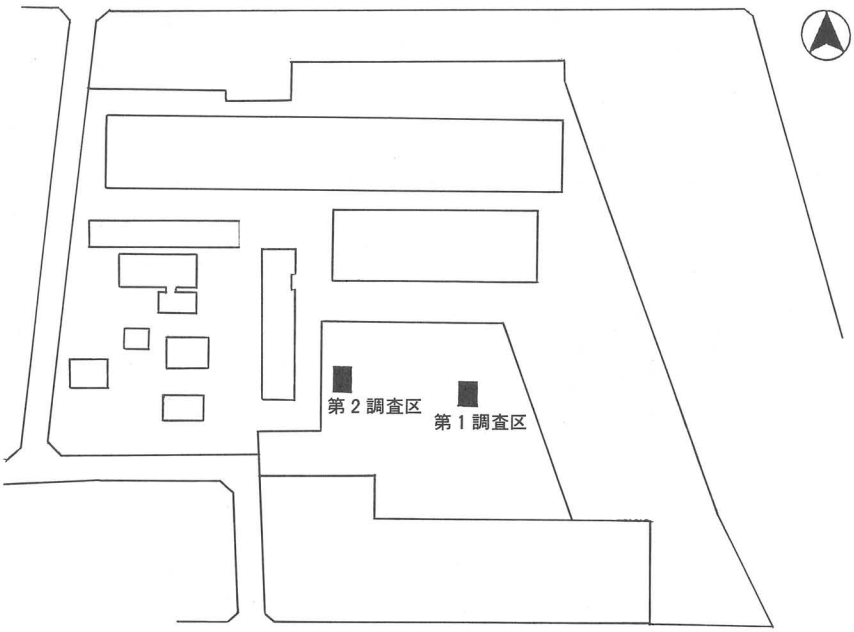
4.調査方法　　４ｍ×３ｍの第１調査区と４ｍ×４ｍの第２調査区の２ヵ所を設定し、各々3.5～4.2ｍまで掘削、調査を行った。

5.基本層序　　第１調査区－現況はＴＰ＋9.05ｍで、地表下1.5～1.7ｍまで盛土されている。遺物包含層は地表下1.8ｍ（TP＋7.25ｍ）の暗灰茶色砂質土とその下部層である褐灰粘土で、およそ0.35ｍの厚さで堆積している。以下では遺物は出土していないが、地表下2.1ｍ前後では暗青灰色粘土を、その下部では黒灰色粘土を確認している。

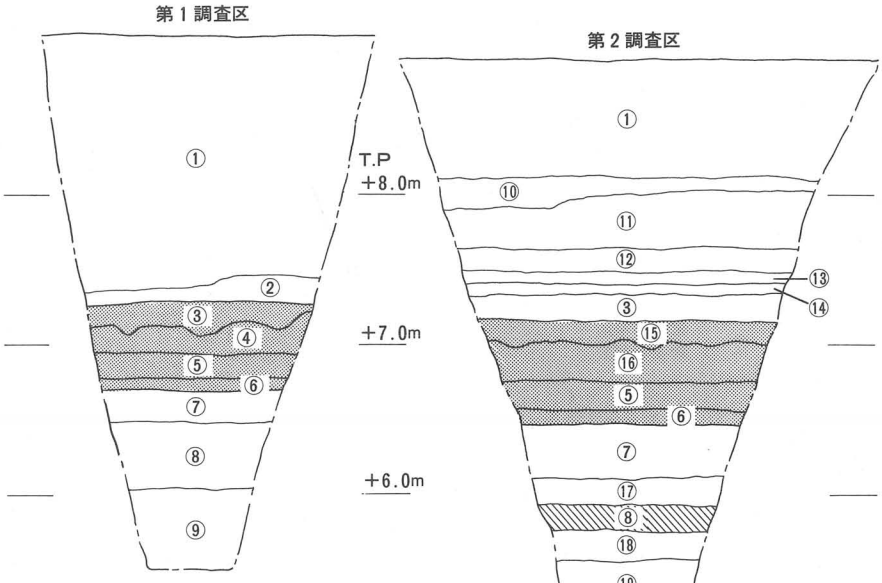
第２調査区－現況はＴＰ＋8.92ｍで、地表下0.8ｍまで盛土されているが北壁ではやや段差があり、約1.2ｍで旧耕作土がみられる。地表下1.53ｍ（TP＋7.39ｍ）前後の褐灰色～灰色粗砂層から遺物が出土しているが、この層は洪水による堆積層とみられる。下部層（TP＋7.06ｍ）は奈良～平安時代の遺構



第11図　調査地周辺図（１／５０００）



第12図　調査区設定図（１／１７５０）



① 盛土
② 茶灰色粘砂
③ 暗灰茶色砂質土
④ 褐灰色粘土
⑤ 暗青灰色粘土
⑥ 黒灰色粘土
⑧ 暗灰色シルト混粘土
⑨ 暗灰色粘土
⑩ 旧耕作土
⑪ 暗緑灰色粘砂
⑫ 淡茶灰色微砂質土
⑬ 明褐灰色微砂シルト
⑮ 褐灰色～灰色粗砂
⑯ 暗灰茶色粘土
⑰ 暗灰緑色シルト混粘土
⑱ 灰黒色粘土
⑲ 灰色砂混粘土
⑳ 灰色細砂

第13図　土層断面図（１／４０）

面となる。また、この遺構の構築層からは須恵器、土師器が出土している。第１調査区で確認された黒灰色粘土は地表下2.35m（TP＋6.57m）でみられた。

6.遺構・遺物　明確な遺構は第２調査区で検出した奈良～平安時代の水田面である。小さな調査区のため畦畔は検出していないが、人や動物の足跡がみられた。

7.まとめ　本調査地の周囲ではこれまで、区画整理事業や民間事業に伴う発掘調査を実施してきた。その結果、弥生前期の集落、古墳時代の集落や墓域、鎌倉時代の水田や建物跡が見つかっている。今回の調査では奈良～平安時代の水田が見つかっており、また古墳後期相当層が確認されている。今後平面的な調査を行うことにより、遺構の拡がりが認められるものと考えられる。（消）

5、東郷遺跡（93-192）の調査

1.調　査　地　東本町１～４丁目

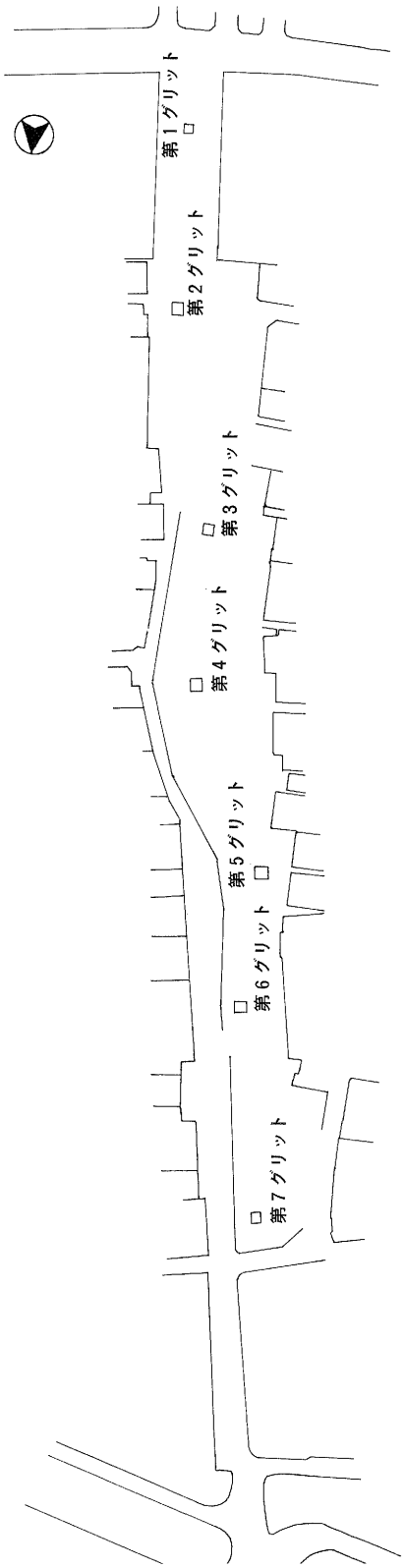
2.調査期間　平成５年10月18日～22日

3.調査契機　道路築造

4.調査方法　約３ｍ四方の調査区を７ケ所設定。地表下2.5ｍ前後まで重機と人力を併用して掘削。

5.基本層序　確認した最も深い部分で、第７グリットのＴＰ6.0ｍになる。すべてのグリットに共通してＴＰ6.6ｍ～7.0ｍで、湧水層である灰白色粗砂層が堆積する。この上は北端の第７グリットを除いては、ＴＰ8.0ｍ前後まで有機物混じりの粘土層、シルト層および粗砂層との互層状の堆積がみられる。湿地状の自然堆積と捉えられる。第７グリットではＴＰ7.6ｍ前後で弥生時代の遺構面を確認している。この上には第１グリットから第４グリットまでは，ＴＰ8.9ｍまで、近世陶磁器を含む粘土、粘質土層が堆積する。これは一部、畦畔などもみられ、水田となる可能性がある。第４グリットでは畑の畝

第14図　調査地周辺図（１／５０００）



第15図　調査区設定図（1／2000）

畦状の遺構がみられた。第５グリット～第７グリットではＴＰ8.1ｍ～8.5ｍで近世の井戸、土壙等のきりこむ面を確認した。

6.検出遺構

主に遺構の検出できた第５グリットから第７グリットについて述べる。

〔第５グリット〕

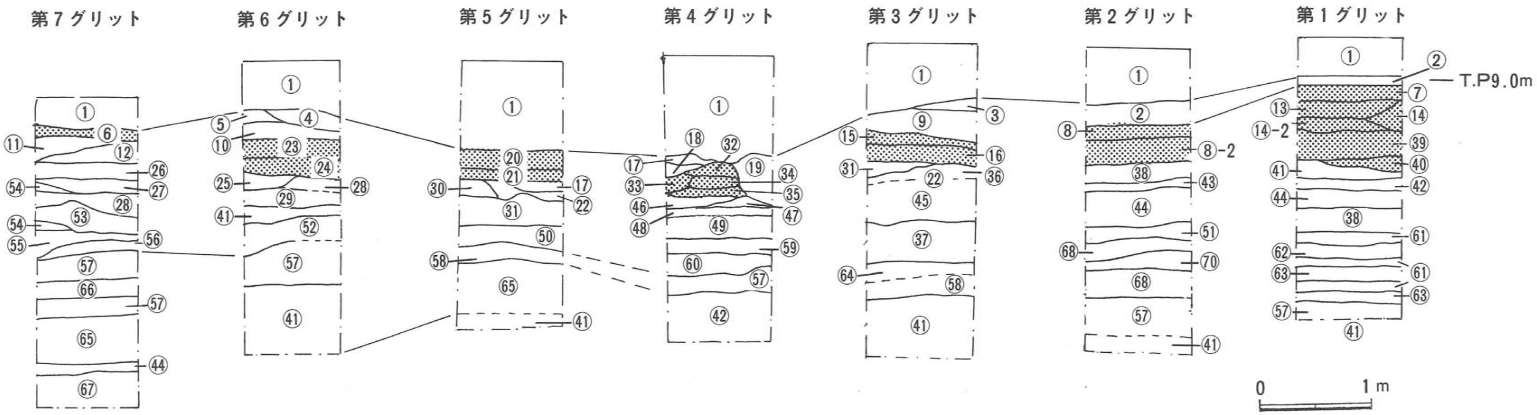
地表下1.08 m、ＴＰ8.1 mの褐色斑緑灰色粘土層上面で不整方形を呈する土壙を検出した。最大辺1.2 m、最大の深さは0.2 mを測る。埋土は上層は暗灰色粘砂層、下層は灰色小礫混砂層である。近世陶磁、巴文軒丸瓦、桟瓦等が出土している。

〔第６グリット〕

地表下0.85 m、ＴＰ8.3 mの茶褐色斑暗灰緑色炭混粘砂層上面で土壙２基、溝１基を検出した。また、この下の地表下1.0 m、ＴＰ8.15 mの褐灰色砂質シルト層上面でピット４基、溝１条を検出した。いずれも近世の新しい段階の遺構である。詳細は一覧表に掲載した。

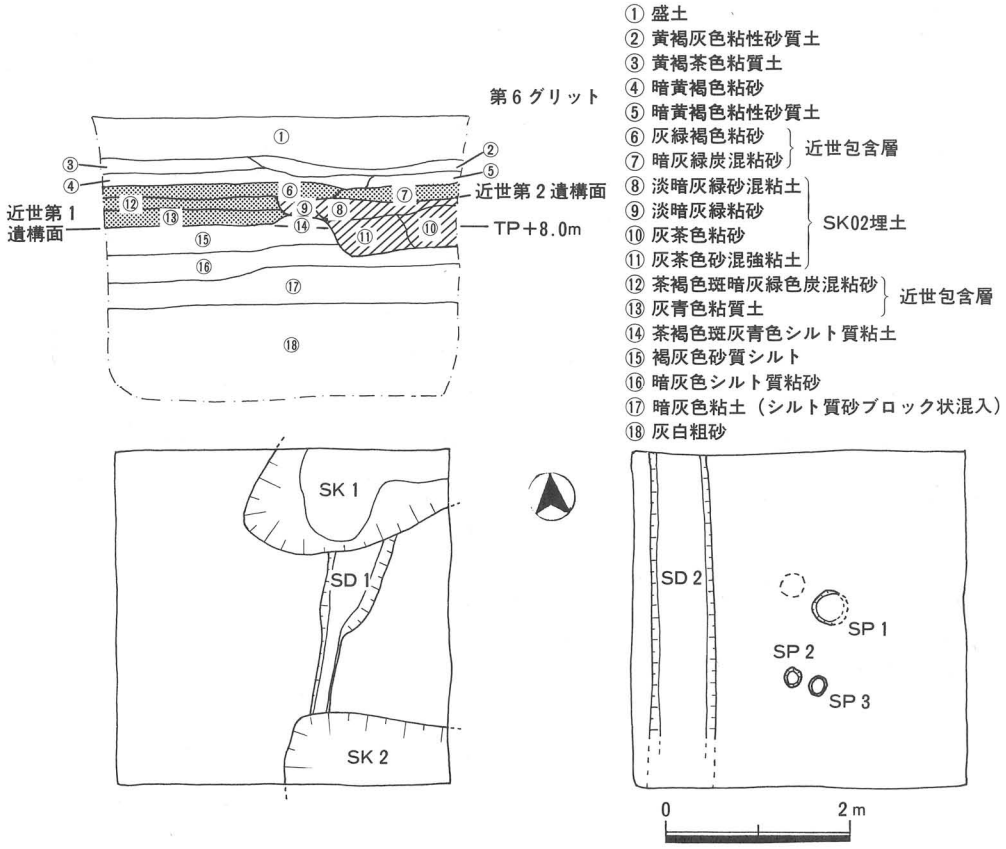
〔第７グリット〕

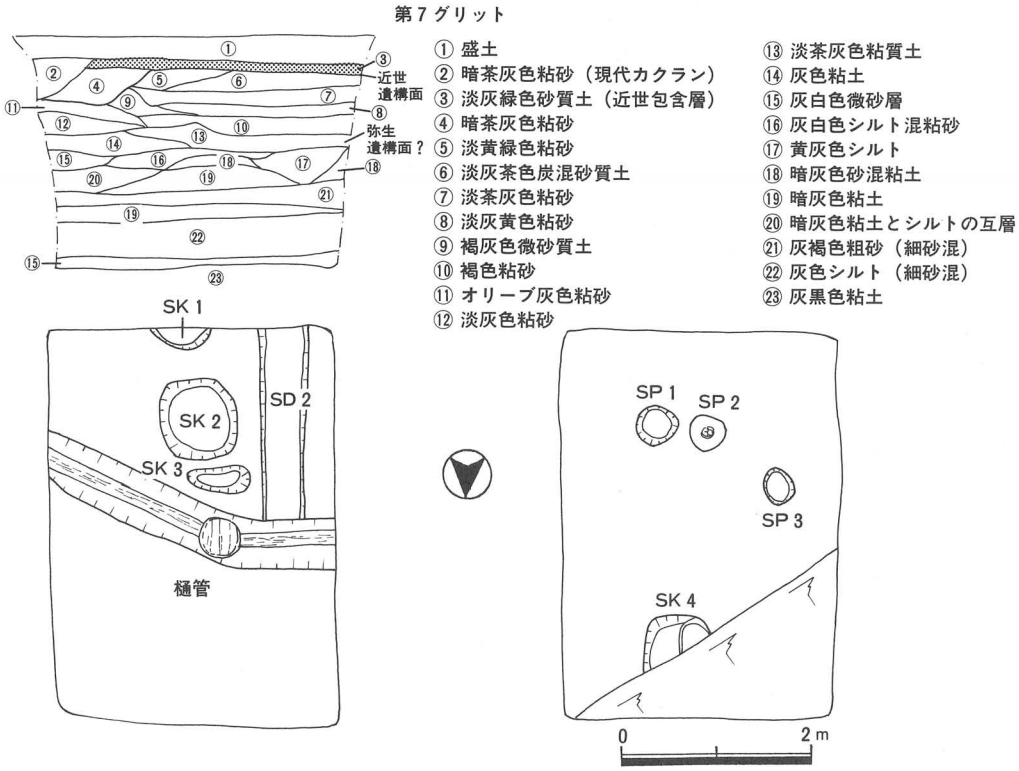
地表下0.85 m、ＴＰ8.5 mの淡灰茶色砂質土上層面で土壙３基、溝１条、樋管１基を検出した。いずれも近世の新しい段階の遺構である。また、地表下1.2 m、ＴＰ7.7 mの灰白色シルト混粘砂層上面で土壙１基、ピット３基を検出した。このうちＳＰ２からは弥生式土器畿内第Ⅳ様式に位置付けられる水差形土器が出土した。この遺構の上に載る層からは弥生土器片等は確認できず、包含層の状況は不明である。ただ、ＴＰ７.９ｍ前後の褐色粘砂層から近世陶磁とともにサヌカイト製の石器の



① 盛土
② 旧耕土
③ 灰茶色砂質土
④ 黄褐灰色粘性砂質土
⑤ 黄褐茶色粘質土
⑥ 淡灰緑色砂質土（近世包含層）
⑦ 黒灰色粘性砂質土 ｝（近世包含層）
⑧ 灰色砂混粘土 ｝（近世包含層）
⑧-2 灰色砂混粘土（色調淡い）
⑨ 茶黄褐色礫混り粘土
⑩ 暗黄褐色粘砂
⑪ 淡黄緑色粘砂
⑫ 淡灰茶色炭混砂質土
⑬ 灰色有機物混粘砂 ｝近世包含層
⑭ 白色斑灰色有機物混粘質土 ｝近世包含層
⑮ 黄灰白色礫混粘質土 ｝近世包含層
⑯ 黄灰白灰色粘土
⑰ 灰緑粘土
⑱ 褐色斑灰緑白色シルト質粘砂
⑲ 青灰緑色粘土
⑳ 灰色小礫混粘砂
㉑ 灰緑色炭混粘砂 ｝近世包含層
㉒ 灰色粘土 ｝近世包含層
㉓ 灰緑褐色粘砂 ｝近世包含層
㉔ 淡暗灰色粘砂 ｝近世包含層
㉕ 灰青色粘質土
㉖ 淡茶灰色粘砂
㉗ 淡茶黄色粘砂
㉘ 褐色粘砂
㉙ 褐灰色シルト
㉚ 褐色斑緑灰色粘土
㉛ 暗緑灰色粘砂
㉜ 褐色斑黄灰白色粘土 ｝畦状遺構
㉝ 褐色斑淡灰色粘土 ｝畦状遺構
㉞ 褐灰茶色シルト質粘土 ｝畦状遺構
㉟ 褐灰色シルト質粘土
㊱ 灰緑白色シルト
㊲ 灰紫色粘土
㊳ 灰緑色強粘土
㊴ 淡灰色砂混強粘土 ｝近世包含層
㊵ 淡灰色粘砂 ｝近世包含層
㊶ 灰白色粗砂
㊷ 灰緑白色微砂シルト
㊸ 暗灰色粘性シルト
㊹ 灰白色微砂シルト
㊺ 褐色斑灰紫色砂混粘土
㊻ 褐色斑灰黄白色微砂シルト
㊼ 淡灰色シルト
㊽ 黄灰白色シルト
㊾ 黄灰白色シルト質粘土
㊿ 黄褐色斑灰色シルト質粘砂
(51) 暗灰色有機物混粘砂
(52) 暗灰色シルト質粘砂
(53) 淡茶灰色粘質土
(54) 褐灰色微砂質土
(55) 灰白色シルト混粘砂
（弥生時代遺構面？）
(56) 暗灰色砂混粘土
(57) 暗灰色粘土
(58) 灰色強粘土
(59) 褐色斑黄灰白色強粘土
(60) 灰白黄色強粘土
(61) 黒灰色粘性シルト
(62) 灰緑色粘性シルト
(63) 灰緑色微砂シルト
(64) 暗灰緑粘性シルト
(65) 灰白色シルト
(66) 灰褐色粗砂～細砂
(67) 黒灰色粘土
(68) 灰白砂層

第16図　土層断面柱状図（１／８０）



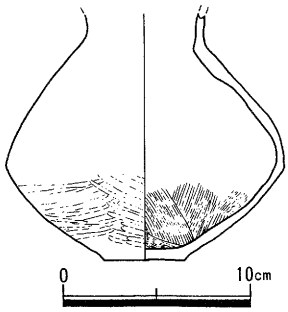


第17図　第６グリット、第７グリット平面・土層断面図（１／４０）

第６グリット・第７グリット検出遺構一覧表

グリット名	ベース面	遺構名	遺構形状他	最大長（幅・辺）	最大深さ	埋土	出土遺物
第６グリット	茶褐色斑暗灰緑色粘砂層	土壙１	不明	２.３ｍ以上	０.６ｍ	上層　淡暗灰緑色粘土 下層　灰茶色砂混強粘土・灰茶色有機物混粘砂	近世陶磁器、種子（桃）、瓦
		土壙２	不明	１.６ｍ以上	0.65m	上層　暗灰緑茶色有機物混粘質土 下層　灰色有機物混強粘土	土師質陶器、近世陶磁器、瓦
		溝１	北で拡がる	0.64m	0.26m	灰色有機物混粘土	瓦器、桟瓦、漆器椀
	褐灰色砂質シルト層	溝２	南北直線方向	０.７ｍ	0.16m	褐色斑灰色粘土	土師質陶器、瓦？
		ピット１	円形	0.34m	0.17m	褐紫色砂質シルト	須恵器片
		ピット２	円形	0.18m	0.15m	灰色強粘土	
		ピット３	円形	０.２ｍ	0.09m	灰色強粘土	
第７グリット	淡灰茶色炭混砂質土層	溝１（樋管）	屈曲部分に、泥落としの樋を設置する。	0.54m	0.18m	暗青灰色粘土	
		溝２	南北直線方向	0.54m	０.１ｍ	淡茶褐色砂質土	
		土壙１	円形？	0.64m	0.06m	淡灰燈色粘砂	桟瓦、土師質陶器、近世陶磁器、瓦質土器
		土壙２	不整円形	0.98m	0.15m	淡灰燈色粘砂	近世陶磁器、瓦器、桟瓦
		土壙３	不整楕円	0.66m	0.08m	淡灰燈色粘砂	
	灰白色シルト混粘砂層	土壙１	方形？	0.84m	0.12m	淡灰色粘質土・暗淡灰色粘質土（内側）	
		ピット１	円形	0.46m	0.08m	黄灰粘土混シルト	土師器片
		ピット２	円形	0.36m	0.13m	暗黄灰色シルト混粘土	水差形土器
		ピット３	円形	０.４ｍ	0.12m	淡灰色粘質土	

の剥片が出土した。水差形土器は体部最大径が下半にあり、やや腰の張るプロポーションである。把手のとり付いた痕跡がみられる。外面下半にヘラミガキ、内面下半にハケメを施す。外面上半は摩滅が著しく調整を観察し得なかった。



第18図　水差形土器実測図（1／4）

7.備　　考

今回の調査では、調査地の南側で、近世の水田状の土層、中央から北側では集落の遺構を確認した。南に接する成法寺遺跡では中世から近世にかけての集落の遺構が検出されている[註1]。本調査においても、中世の遺構の検出に努めたが、確実な遺構面は確認できなかった。ただ、近世陶磁とともに瓦器片、白磁片なども出土していることから、近世段階での削平をかなり受けてはいるものの、一部残っている可能性がある。また、第7グリットでピット内から出土した弥生土器は注意される。東郷遺跡の中央部では、顕著な弥生時代中期の遺構は確認されていない。今後、その拡がりを確認する上でも、今回の調査成果は貴重な資料となる。　（吉田）

註1　大阪府教育委員会　『成法寺遺跡発掘調査概要Ⅵ』　1992年
　　八尾市教育委員会　『平成3年度発掘調査報告書Ⅰ』　1992年

6、中田遺跡（92-598）の調査

1.調　査　地　　中田１丁目～４丁目

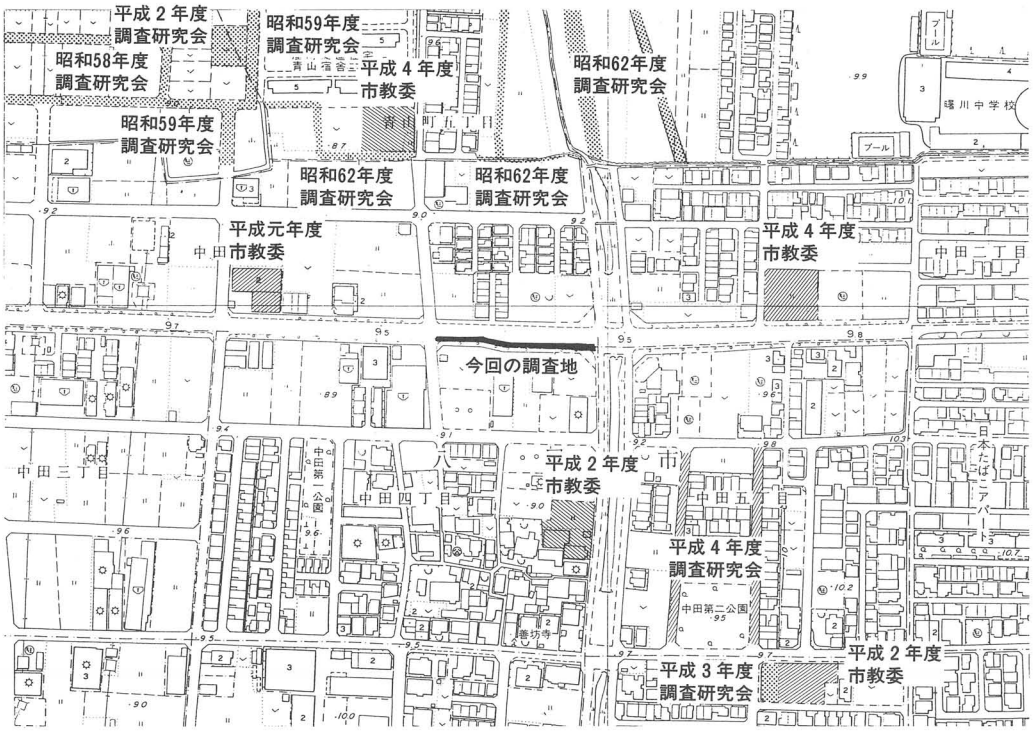
2.調査期間　　平成５年３月11・12・16日

3.調査契機　　公共下水道工事

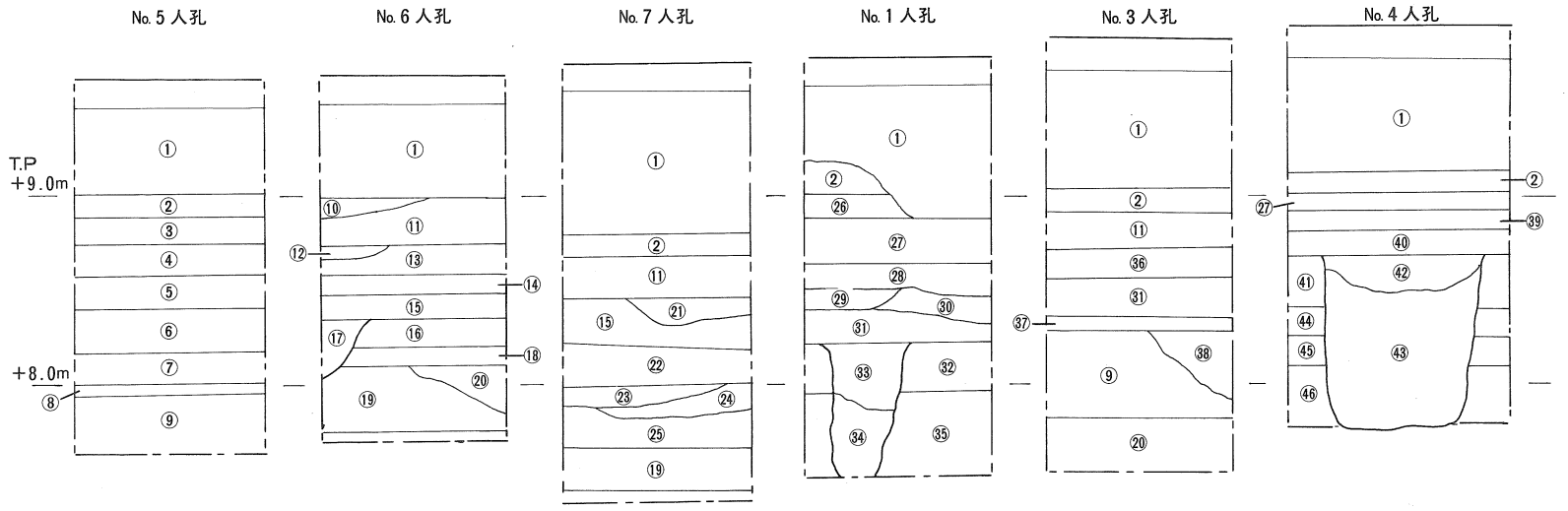
4.調査方法　　人孔部分（1.5ｍ×1.5ｍ）７ヵ所で、各々約２ｍまで掘削し、遺構・遺物の有無を確認した。

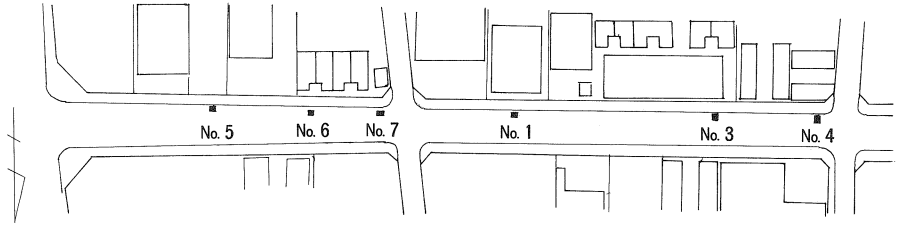
5.基本層序　　〔No5人孔〕－遺物がＧＬ－0.75ｍの明褐色粘砂からみられる。ＧＬ－0.9～1.4ｍの淡褐灰色粘砂～砂質土では瓦器、須恵器、土師器の細片が出土している。また、粘質シルト層を挿んでＧＬ－1.65ｍ前後の灰白色粘土でも瓦器片が出土しており、その下部層では無遺物層である褐色細砂層が堆積する。

〔No6人孔〕－ＧＬ－0.65ｍの暗茶灰色粘質土では須恵器の甕、土師器の杯の破片など７～８世紀頃とみられる遺物が出土しており、その下部の明褐灰色粘砂上面では溝を検出している。ＧＬ－1.15ｍの暗褐色砂質土では口縁端



第19図　調査地周辺図（１／５０００）





① 盛土
② 旧耕土
③ 明褐色粘砂
④ 淡褐灰色粘砂
⑤ 淡褐色粘砂
⑥ 淡褐灰色砂質土
⑦ 灰白色粘質シルト
⑧ 灰白色粘土
⑨ 褐色細砂
⑩ 暗灰茶色粘砂
⑪ 暗茶灰色粘質土
⑫ 淡褐灰色粘砂
⑬ 明褐色粘砂
⑭ 暗茶灰色粘砂
⑮ 暗褐色砂質土
⑯ 褐色粘質シルト
⑰ 暗灰色砂混粘土
⑱ 灰色粘質土
⑲ 暗青灰色粘土
⑳ 暗青灰色シルト
㉑ 暗茶灰色砂質土
㉒ 暗灰茶色粘砂
㉓ 黄褐灰色シルト
㉔ 明灰色シルト
㉕ 灰色微砂混シルト
㉖ 暗緑灰色粘質土
㉗ 淡黄灰色粘質土
㉘ 灰色砂礫混シルト
㉙ 灰色炭混砂質土
㉚ 淡茶灰色粘砂
㉛ 暗褐色砂礫混粘質土
㉜ 淡褐灰色シルト
㉝ 暗褐灰色シルト混粘質土
㉞ 灰色砂礫混シルト
㉟ 淡灰白色シルト
㊱ 淡茶灰色粘砂
㊲ 褐色砂質土
㊳ 淡黄灰色シルト混粘砂
㊴ 暗褐灰色粘質土
㊵ 灰褐色粘質土
㊶ 褐灰色粘質土
㊷ 灰淡褐色粘質土
㊸ 暗灰色炭混粘土
㊹ 淡灰色粘土
㊺ 灰色粘土
㊻ 褐色斑暗青灰色シルト

第20図　調査区設定図（1／2000）及び基本層序模式（1／40）

部が肥厚している布留式期の甕などが出土しているが、下部層である褐色シルトからは甕と思われる須恵器片や土師器の高杯など古墳時代中期から後期に位置付けられる遺物が出土していることから天地返しが起こっており、整地層とみられる。そして、ＧＬ－1.45ｍ前後以下の灰色粘質土と暗青灰色粘土では布留式期の甕や高杯の脚部、壺の胴部などが出土している。この下部の黄褐色粗砂質土は固く締まっており、遺構面となる可能性がある。

〔No7人孔〕－旧耕作土下の暗茶灰色粘質土から遺物はみられるが、土師器の細片が多い。ＧＬ－1.7ｍの黄褐色シルトでは布留式期の遺物が若干出土しているが、No6人孔と比較すると遺物の時期幅、量とも乏しいものとなっている。

〔No1人孔〕－ＧＬ－1.3ｍの暗褐色砂礫混粘質土を切り込む淡灰色炭混粘質土では須恵器の杯蓋片や土師器を含んでいる。このベース層中からはＶ様式系の甕片や庄内甕片などが出土しており、この下部の淡褐灰色シルト上面には炭化物が多くみられ、土坑状遺構を確認している。土坑は一部区外へ伸びるが短径0.45ｍ、長径（検出部）0.5ｍ、深さ0.7ｍ以上で、埋土は２層に分けられ、庄内甕片、石器剥片が出土している。

〔No3人孔〕－ＧＬ－0.9ｍの淡茶灰色粘砂から土師器細片みられ、その下部の淡茶灰色砂混粘砂上面ではピットを１基検出している。

〔No4人孔〕－ＧＬ－0.95ｍの暗褐色粘質土では土師皿、瓦器、須恵器の砕片がみられ、この下部灰褐色粘質土では瓦器椀片が多く出土する。そしてＧＬ－1.2ｍの褐灰色粘質土上面で井戸を検出する。井戸の詳細については後述する。ＧＬ－1.45～1.8ｍの淡灰色粘土～灰色粘土では８世紀頃に比定できる土師器や須恵器片が出土している。

６.遺 構・遺 物

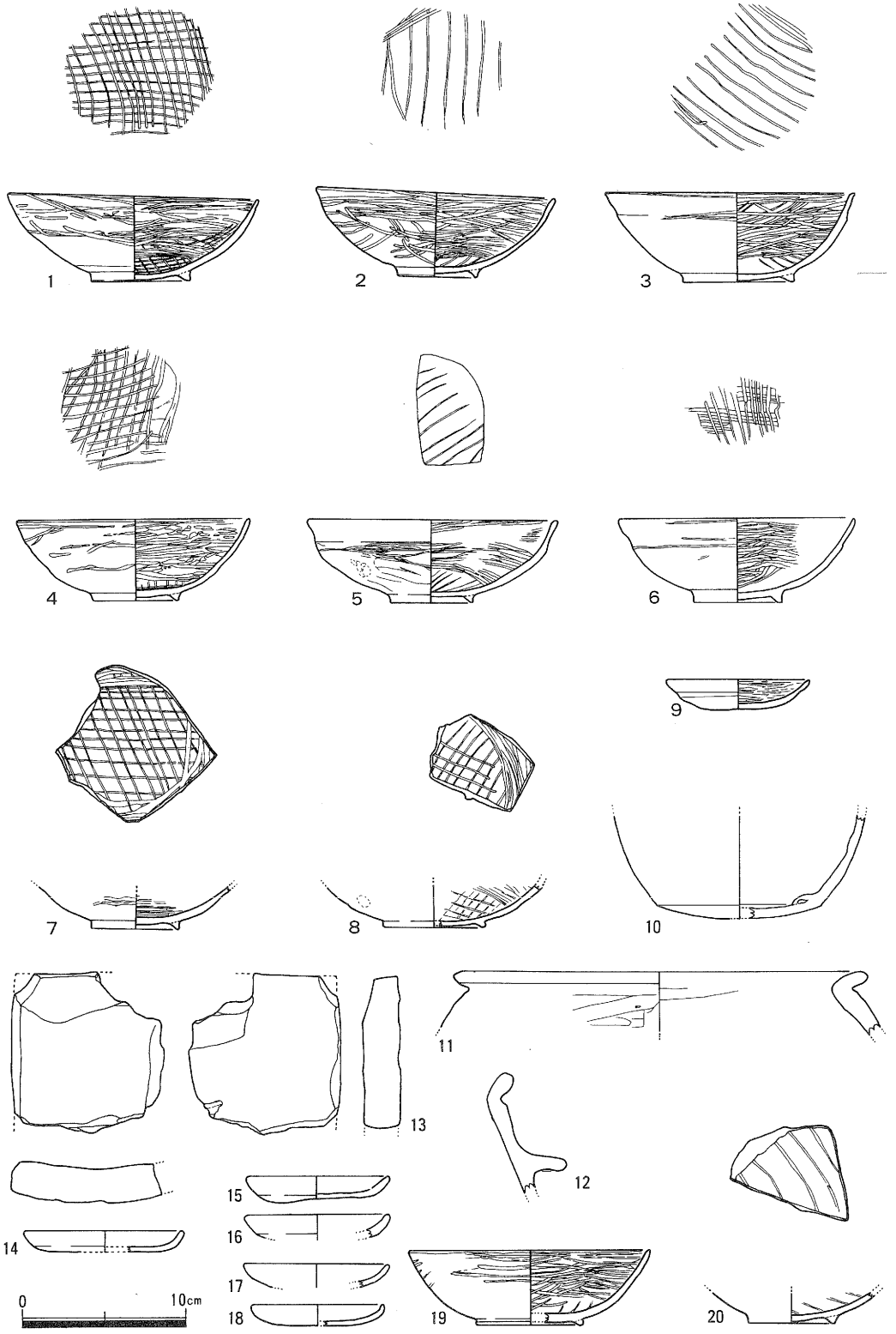
ここではNo4人孔で検出した井戸について記述する。井戸はＧＬ－1.2ｍの褐灰色粘質土上面で検出した。遺構の東半分は調査区外に伸びるため正確な形状はつかめなったが、ほぼ円形を呈するものと思われる。径約0.75ｍ、深さ0.93ｍを測り、素掘りで枠などはみられなかった。内部は上層の淡灰褐色粘質土、下層の暗灰色粘土に分層でき、下層には炭化物が含まれていた。出土遺物は上層で瓦器椀（１～８）が多く出土しており、他に瓦器皿（９）、須恵器（10）等が出土している。下層では羽釜（11・12）、平瓦（13）や土師皿、杯等がみられ、また図化していないが焼けた痕跡のある平瓦が２点出土している。このうち１点は側面をヘラ削りして整えており、１枚作りとみ

られ、もう１点は側面に分割破面を残しており、桶巻き作りの可能性が高い。

さて、次に井戸の時期を検討してみる。上層で出土している瓦器椀は見込み部の暗文が格子状ミガキと平行線状ミガキの２種類があり、高台も断面三角形のものと台形のものが共存している。内面のヘラミガキは比較的密に施されているが、外面は上半部を粗雑にヘラミガキを行い、下半部にはヘラミガキは殆どみることはできず、指頭痕が残る。このようなことから尾上編年のⅡ－２期からⅡ－３期に属するものと思われ、12世紀中葉から後半にかけての年代を考えられる。また下層出土の羽釜についてはいずれも「く」の字に外反する口縁端部をもつもので、（11）は内外面とも２次的に過熱を受けて調整がはっきりしないが外面にヘラケズリが観察できる。（12）は内面が乳褐色を呈し、横方向のハケメ調整を施している。これらから森島氏による型式分類のＡおよびＢ型式に分類でき、12世紀中葉から後半にかけての時期の該当するとされる。以上から井戸の上層と下層については大きな時期差は認められず、平安時代末頃に用いられ、短期間で廃絶されたものと推定されよう。

7．備　　考　調査地の北側で平成４年度に鎌倉時代初頭の遺構面を検出し、軒丸瓦と帯金具状製品が出土している。また南側では中田遺跡調査会によって寺院の存在が推定されている。今回の調査は、時期的にこれらの調査成果との関連が推定され、寺院あるいは屋敷等の存在を裏付ける結果となった。　（渣）

１）尾上　実「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』1983年
２）森島　康雄「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』1990年



第21図　出土遺物実測図（1／4）

7、中田遺跡（93-289）の調査

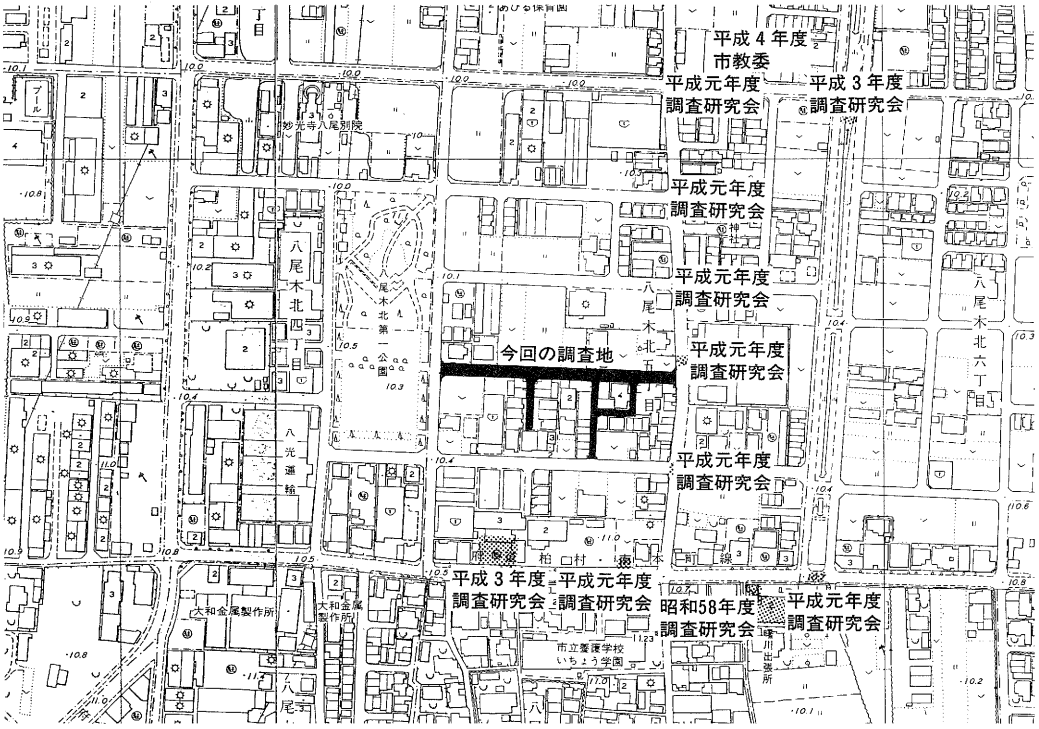
1.調　査　地　　八尾木北５丁目地内

2.調査期間　　平成５年10月13日～16日、11月22日

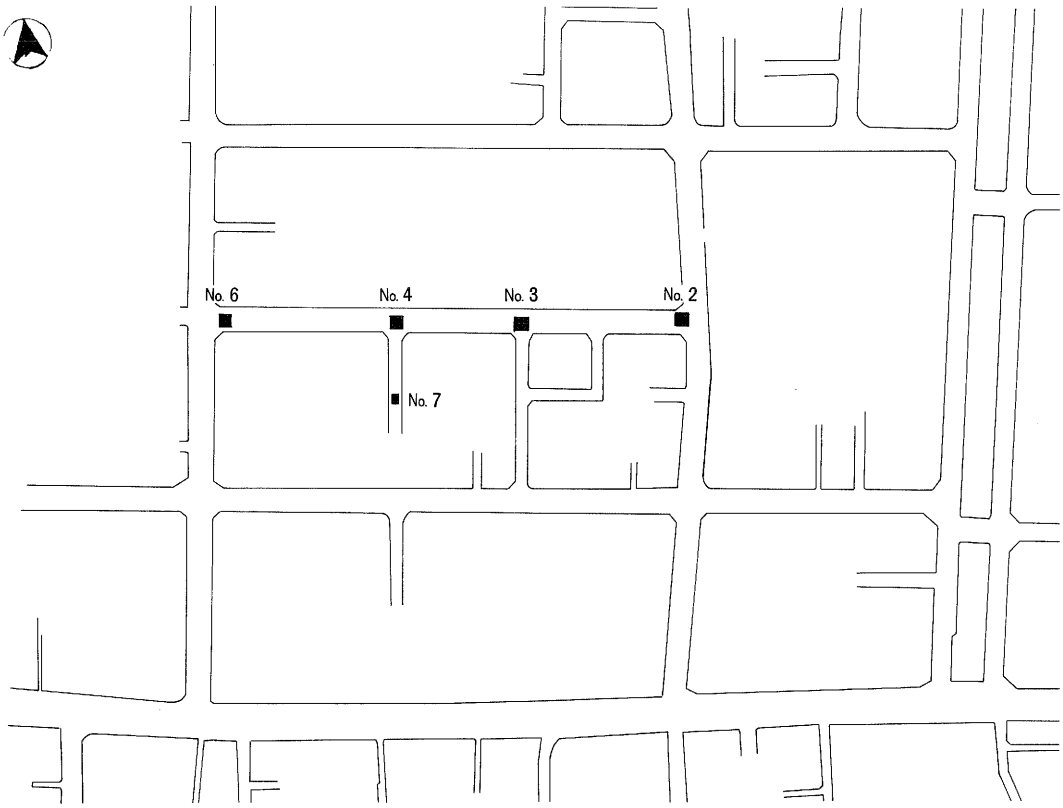
3.調査契機　　公共下水道工事

4.調査方法　　No2、No3、No4、No6、No7人孔設置に伴う遺構確認調査。地表下2.5ｍ前後まで重機と人力を併用して掘削。

5.調査概要　　〔No2人孔〕地表下1.84ｍ～2.36ｍ（ＴＰ8.16ｍ～8.68ｍ）で庄内式土器を密に含む層を確認した。この層は中間に遺物を含まない有機物混灰紫色粘土をはさんでおり、上層は暗灰紫色炭混粘土で、下層は緑灰白色強粘土層である。遺物は下層で特に密にはいっており、特に上面付近および下方の砂のやや多くなる部分に集中する。一個体がその場で潰れた状態で出土しているものも多くみられた。この緑灰白色強粘土層は北壁で西側で高まっており、対応して有機物層も消えている。このような土層の堆積状況から、この層は西側から落ち込む大溝もしくは落ち込み等の埋土である可能性が高い。



第22図　調査地周辺図（１／５０００）



第23図　調査区設定図（１／２５００）

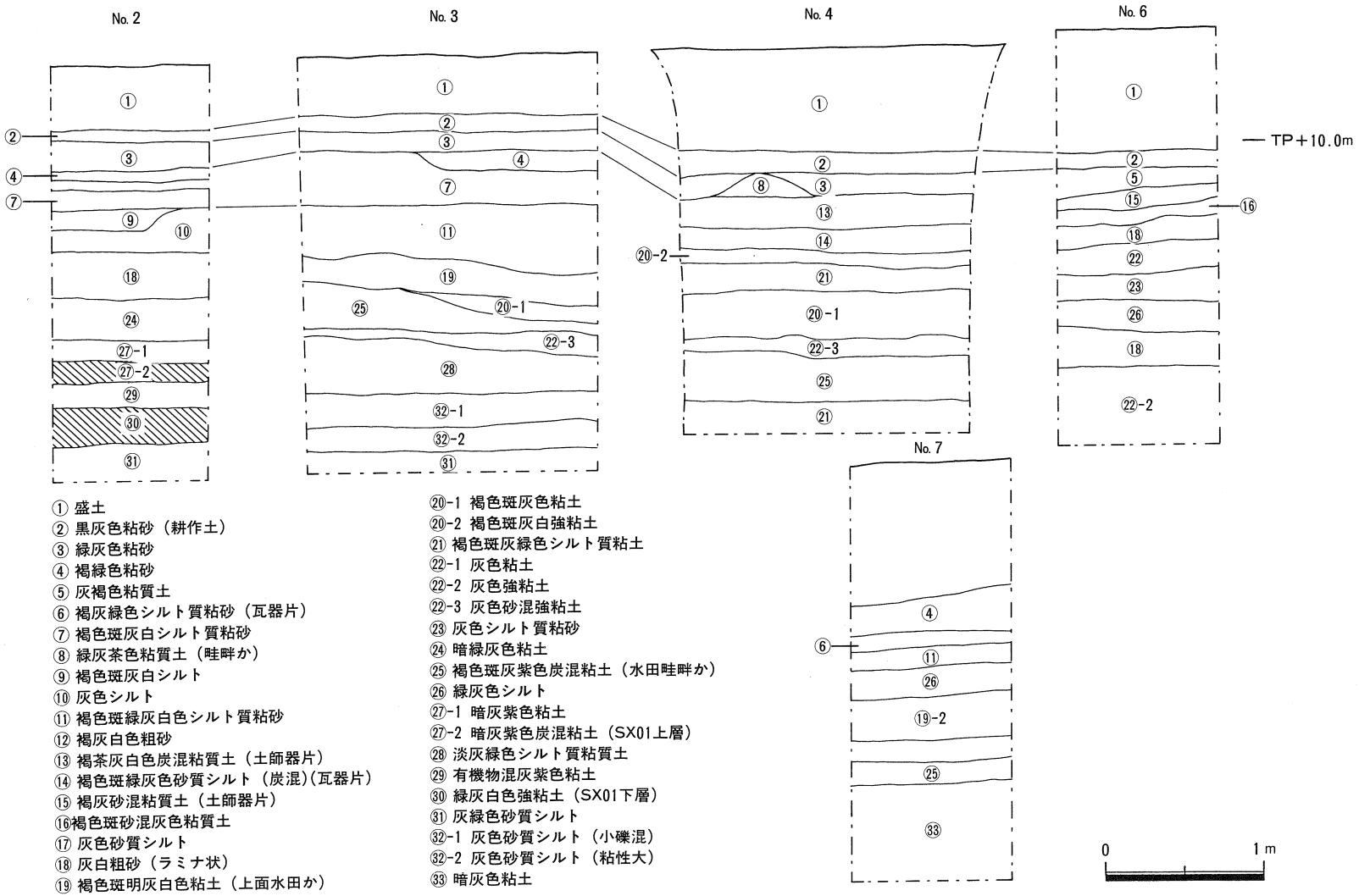
No3人孔では淡灰緑色シルト質粘質土層を確認しており、この層と対応してくる可能性がある。いずれにしても遺物の出土状況から、包含層の遺物とは考えにくく、なんらかの遺構に伴う遺物と考えられる。ここでは、この層の出土遺物を、便宜上ＳＸ01出土遺物と仮称し、別項で取り扱いたい。

〔No3人孔〕地表下1.4m～1.7m、ＴＰ9.22ｍ～8.92ｍで褐色斑灰紫色炭混粘土の高まりを確認した。水田の畦畔等になる可能性があるが、判然としない。また、この上の褐色斑緑灰白色シルト質粘砂層にも褐灰色粗砂層が足跡状にブロックで入っており、水田面となる可能性がある。遺物はまったくみれず、時期は不明である。

〔No4人孔〕地表下0.7m（ＴＰ9.7m）の褐茶灰白色炭混粘質土層上面で畦畔状の高まりを確認した。褐茶灰白色炭混粘質土層は土師器小片を含み、この下の褐色斑緑灰色砂質シルト層は瓦器小片を含む。地表下1.3m（ＴＰ9.3m）の褐色斑灰白色強粘土層上面でも足跡状の粗砂層の落ち込みがみられ、水田面となる可能性がある。

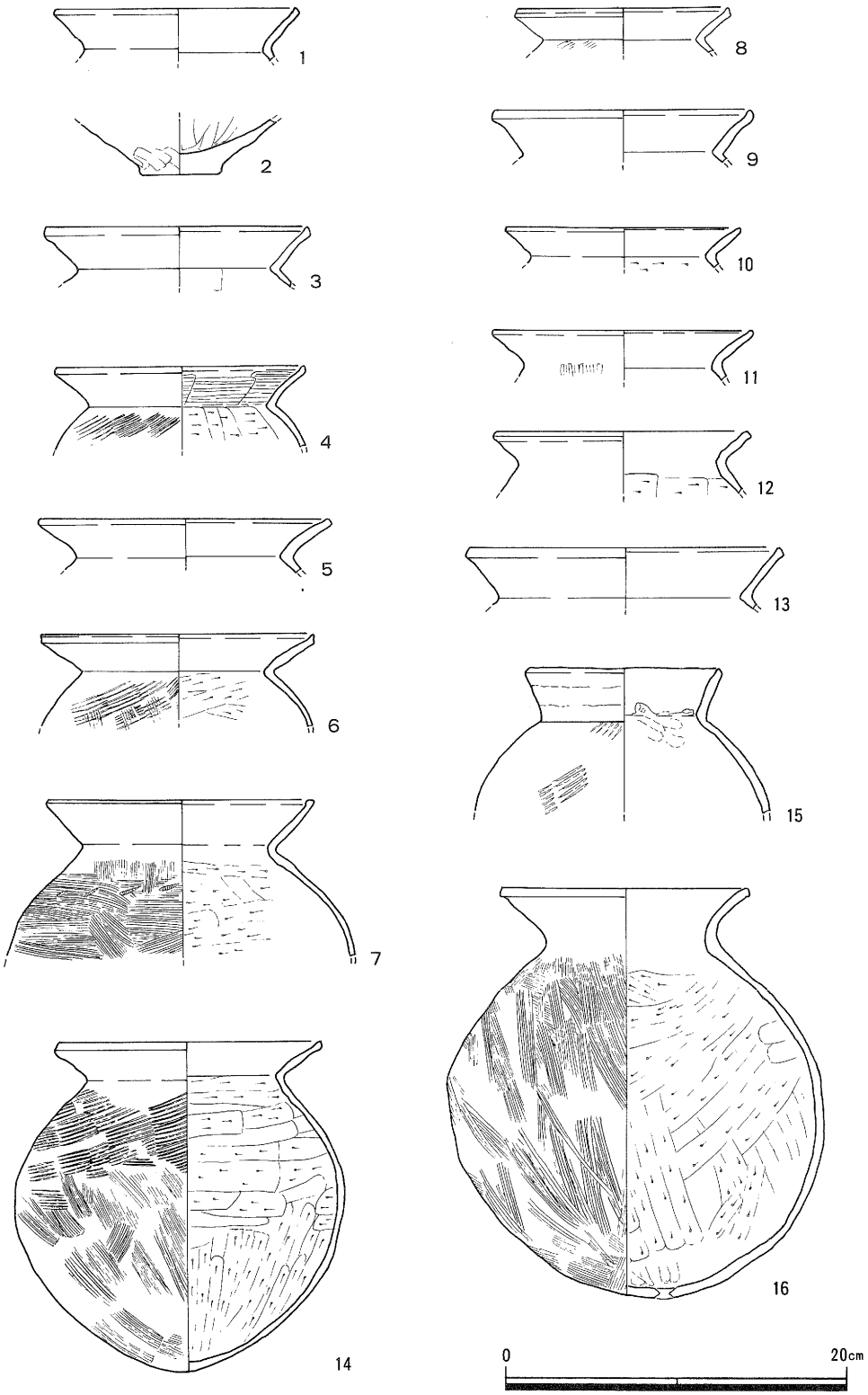
〔No6〕地表下1.34ｍ（ＴＰ9.36ｍ）で水田面になる可能性のある灰色粘土層を確認した。また、地表下1.1mの褐灰色砂混粘土層には土師器小片が含まれている。

〔No7人孔〕No3人孔の南側にあたる人孔である。層序はほぼNo3人孔のそれと共通する。No3人

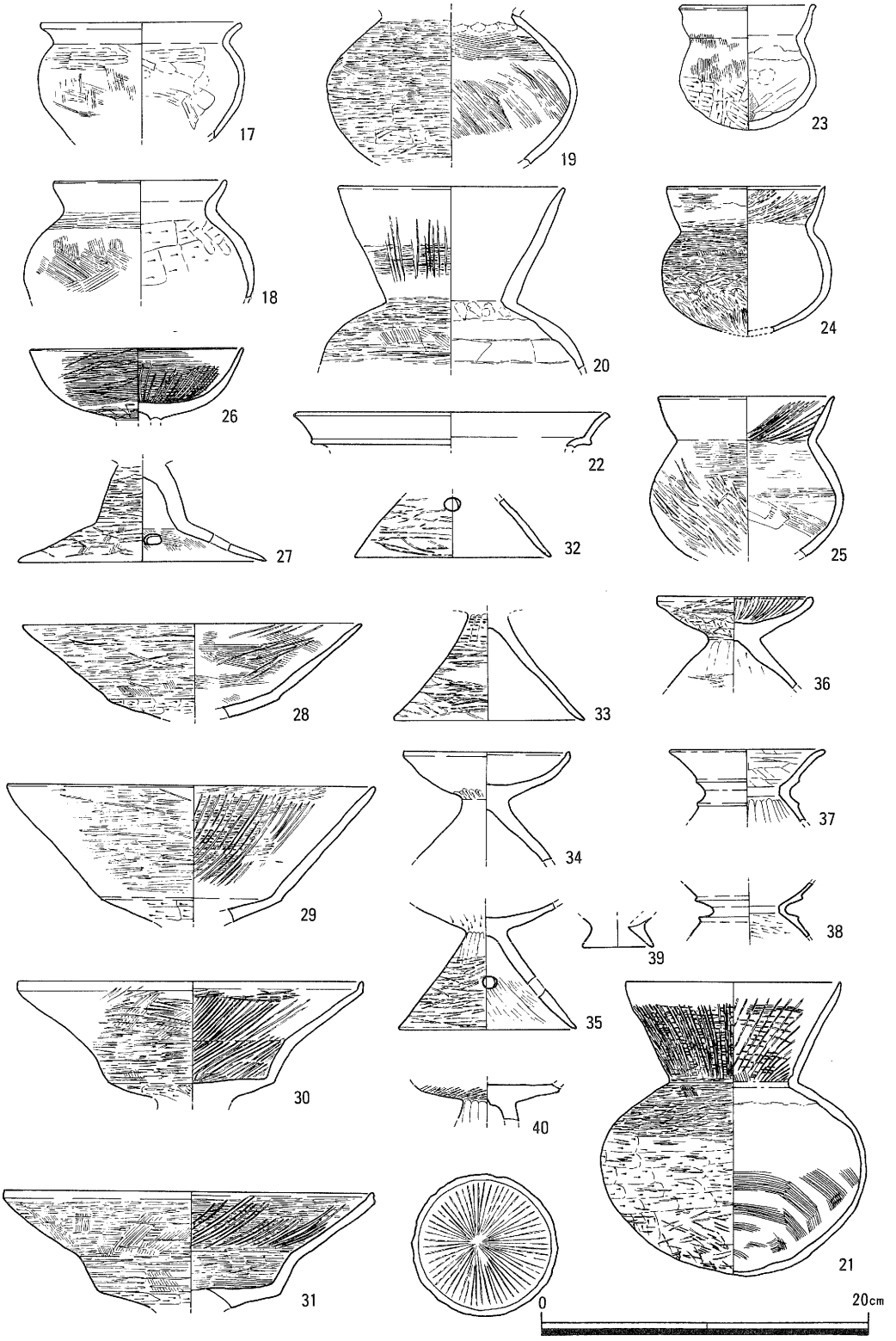


① 盛土
② 黒灰色粘砂（耕作土）
③ 緑灰色粘砂
④ 褐緑色粘砂
⑤ 灰褐色粘質土
⑥ 褐灰緑色シルト質粘砂（瓦器片）
⑦ 褐色斑灰白シルト質粘砂
⑧ 緑灰茶色粘質土（畦畔か）
⑨ 褐色斑灰白シルト
⑩ 灰色シルト
⑪ 褐色斑緑灰白色シルト質粘砂
⑫ 褐灰白色粗砂
⑬ 褐茶灰白色炭混粘質土（土師器片）
⑭ 褐色斑緑灰色砂質シルト（炭混)(瓦器片）
⑮ 褐灰砂混粘質土（土師器片）
⑯褐色斑砂混灰色粘質土
⑰ 灰色砂質シルト
⑱ 灰白粗砂（ラミナ状）
⑲ 褐色斑明灰白色粘土（上面水田か）
⑳-1 褐色斑灰色粘土
⑳-2 褐色斑灰白強粘土
㉑ 褐色斑灰緑色シルト質粘土
㉒-1 灰色粘土
㉒-2 灰色強粘土
㉒-3 灰色砂混強粘土
㉓ 灰色シルト質粘砂
㉔ 暗緑灰色粘土
㉕ 褐色斑灰紫色炭混粘土（水田畦畔か）
㉖ 緑灰色シルト
㉗-1 暗灰紫色粘土
㉗-2 暗灰紫色炭混粘土（SX01上層）
㉘ 淡灰緑色シルト質粘質土
㉙ 有機物混灰紫色粘土
㉚ 緑灰白色強粘土（SX01下層）
㉛ 灰緑色砂質シルト
㉜-1 灰色砂質シルト（小礫混）
㉜-2 灰色砂質シルト（粘性大）
㉝ 暗灰色粘土

第24図　土層断面柱状図（１／４０）



第25図　出土遺物実測図－１（１／４）



第26図　出土遺物実測図－２（１／４）

	甕	広口壺	直口壺	複合口縁壺	小型壺	小型精製壺	高杯	小型器台	山陰系器台	製塩土器	計
上層	7	0	0	0	0	0	0	2	1	0	10
下層	63	3	3	1	4	3	9	6	1	1	94
計	70	3	3	1	4	3	9	8	2	1	104

〔SX01 器種別個体数一覧表〕

孔で確認した畦畔状の褐色斑灰紫色粘土も地表下1.7 m～2.0 m、（ＴＰ8.92 m～8.62 m）で確認している。No3と異なるのは、この下に暗灰色粘土が堆積することで、土師器片を含む。

6．SX01出土遺物

コンテナ３箱程出土した。甕（１、３～14）、広口壺（15、16）、小型壺（17、18）、直口壺（19～21）、複合口縁壺（22）、精製の小型壺（23～25）、高杯（26～31）、小型器台（32～36）、ミニチュアの鼓形器台（37、38）、製塩土器（39）がある。１～３、37が上層の暗灰紫色砂混粘土、他が下層の緑灰白強粘土の出土である。甕はほとんどが河内型庄内甕とされるもので、口端部を上方につまみあげぎみに収めるもの（１、３、４、６、８、９、11、13、14、）、内面をやや肥厚させるもの（５）、そのまま丸く収めるもの（10）、外方にややつまみだすもの（12）などがある。内面のヘラケズリはほとんどが頸部の屈曲部まで行っているが、屈曲部のやや下に留まるもの（12）もある。また、口縁部が内湾し、端部が内側に肥厚する布留式甕の範中に入るもの（７）も１点出土している。14は全形のわかる庄内甕で球形に近い体部に、鋭く屈曲する口縁がつく。口端部外面に明瞭な面をもつ。外面はタタキののち細筋のハケメを中位のやや上まで施す。16は淡乳灰色を呈する広口壺である。底部に焼成後の穿孔がある。18は体部外面にススが付着しており、小型の甕になるかもしれない。19～21の直口壺は概ね暗橙褐色を呈する、精製品である。23～25は橙灰色から灰茶色を呈する精製の小型壺である。布留式の小型丸底壺の祖形となる口縁部のやや内湾するタイプである。24、25は底部を中心に破損しており、人為的な打ち欠きであるかもしれない。高杯は杯部が椀状のもの（26）、外折して開くもの（28、29）、２段に屈曲して開くもの（30、31）がある。26、29～31は暗橙褐色から淡赤橙色を呈する精製品である。小型器台は口縁部が若干たちあがるもので、橙色系の精製品である（33～36）。33は杯部が下層から、脚部が上層から出土している。37、38は山陰系の鼓形器台のミニチュアで、乳白色を呈し、胎土は粗い。形態的にほとんど同じタイプであるが、上層から出土した37は、内面全体にミガキを行なっているのに対し、38は下半部にヘラケズリを行なっている。39は製塩土器の支脚部である。淡赤橙色を呈し、胎土は非常に粗い。40は２段に屈曲する高杯の杯底部である。周縁をきれいに打ち欠いている。祭祀に伴うものか、蓋などに転用されたものかは判然としない。

以上からＳＸ01出土土器は、庄内式の新段階から布留式の最古段階に位置付けられよう。次に器種別の数をだしてみた。実測した個体を含め、口縁部破片について計数を行なった。一括資料ではないため、自ずと限界があるのだが、ある程度の傾向はとらえ得るのではないかと考え、あえて行なってみた。器種別の比率は甕が67％、壺が14％、高杯及び器台が18％である。この比率は通常の集落の様相と変わりない。しかし、壺、高杯、器台などの出土状況は特異なものがある。まず注意されるのは、高杯、器台などは杯部と脚部が割れて離れた状態で出土しているものが多いことである。また、16の壷は底部に焼成後の穿孔を行なっている。23、24の小型丸底壺も底部を打ち欠いている可能性がある。また、山陰系のミニチュアの器台（37、38）や製塩土器片（39）も出土しており、集落で日常使用されていた土器の様相とはやや質を異にする。土器を打ち割って投棄するなんらかの祭祀的行為のあった可能性も考えられる。具体的には大型の広口壺などは穿孔を行ない、小型の精製壺は底部を打ち欠き、高杯、器台などは、接合部で打ち割るなどしたのちに、投棄しているものと思われる。また、高杯、器台の杯底面や直口壺の口縁内面には摩滅、剥落の痕の認められる個体があり、使用痕を留めるものかもしれない。さらに、上層と下層で接合できる個体がみられた。23は上層と下層で杯部と脚部が別れて出土している。同様に30は杯底部が上層から、杯口縁が下層から出土している。厚さ15㎝の有機物を含んだ間層をはさんで接合した資料だけに興味深い。上層と下層の土器は時間差はあるが、同時期の一連の祭祀行為のなかで投棄された可能性がある。このような想定が許されるならば、これらの土器は一時期共存する資料と捉えられよう。しかしながら、当資料は下水道工事の人孔部の調査であるため、遺構の輪郭を確認できず、土層堆積状況と遺物の出土状況からのみの所見という弱味がある。ここでは可能性を指摘するに留め、今後の資料の増加を待ちたい。

７.ま　と　め

本調査地の東側に接する南北方向の市道でも、下水道工事に伴う調査で弥生時代前期から平安時代の遺構、遺物が確認されている[註1]。古墳時代前期の包含層もＴＰ8.5ｍ前後で確認されているが、遺構は確認されておらず、遺物量も少ない。No2人孔のすぐ東側でも人孔の調査がおこなわれているが、主に弥生時代中期の遺構が確認されているのみである。しかし、今回の調査の成果は、非常に密度の濃い古墳時代初頭の集落の拡がりを伺わせるものであった。調査地西側では水田面かと思われる土層も確認しており、今後の周辺の調査が注意される。　（吉田）

註１（財）八尾市文化財調査研究会『平成４年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』１９９２年

遺物観察表

番号	器種	部位	法量(cm) 径	法量(cm) 現高	形態	調整・文様	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	甕	口縁部	14.0	3.1	口端部やや上方につまみあげ気味で、外面に面を持つ。	口縁部内外面　ナデ	暗灰茶色	硬質	やや粗	口縁約1/4弱	上層出土
2		底部	4.4	3.3		底外面　板ナデ 内面　板ナデ	淡灰茶色	硬質	粗	底部約1/2	上層出土
3		口縁部	15.2	3.6	口端部は上方につまみあげ、外面に面を持つ。	口縁部内外面　ナデ 体内面　ケズリ	灰茶褐色	硬質	粗	口縁約1/4	上層出土
4			14.3	4.95	口端部は上方につまみあげ、外面に面を持つ。	口縁部外面　ナデ 内面　ハケメ 体外面　タタキ 内面　ケズリ	淡灰茶色	硬質	普通	口縁約1/4	口縁外面ース付着
5			16.8	3.3	口端部は外面にあまい面を持つ。	口縁部内外面　ナデ 体内面　ケズリ	黒灰色	硬質	良	口縁約1/4	外面ース付着
6			15.6	5.4	口端部は上方につまみあげ、外面に面を持つ。	口縁部内外面　ナデ 体外面　タタキ 内面　ケズリ	黒灰色	硬質	やや粗	約1/4	外面ース付着
7			15.2	9.2	口縁部はやや内湾気味で、端部は内面で肥厚。肩部はやや張る。	口縁部内外面　ナデ 体外面　ハケメ 内面　ケズリ	灰黒色	やや硬質	やや粗	約1/4	
8			12.2	2.75	口端部は上方へつまみあげ、外端部は凹線状に凹む。	口縁部内外面　ナデ 体外面　ハケメ 内面　ケズリ	灰茶褐色	硬質	普通	口縁約1/4	外面ース付着
9			15.0	3.2	口端部は上方につまみあげ、外面に面を持つ。	口縁部内外面　ナデ 体内面　ケズリ	暗灰茶色	硬質	粗	口縁約1/4弱	
10			13.7	2.5	口端部はほぼ丸く収める。	口縁部内外面　ナデ 体内面　ケズリ	乳白色	やや軟質	やや良	口縁約1/5弱	外面ース付着
11			15.1	3.1	口端部はほぼ丸く収める。	口縁部内外面　ナデ 体外面　ハケメ 内面　ケズリ	茶灰色	硬質	粗	口縁約1/6弱	外面ース付着
12			14.6	3.7	口端部は外方にややつまみだし、面を作る。	体内面　頸部のやや下までケズリ 他はナデ	乳白色	やや軟質	粗	口縁約1/5弱	
13			18.2	3.7	口端部は上方につまみあげ、外面に面を持つ。	口縁部内外面　ナデ 体内面　ケズリ	淡灰茶色	硬質	やや粗	口縁約1/4弱	
14		ほぼ完形	15.0	19.5(全高)	体部最大径はほぼ中位にあり、体部は球形で、口縁部は鋭く屈折し、口端部は外面に明瞭な面を作る。	口縁部内外面　ナデ 体外面上半　タタキのち中位のやや上までハケメ 下半　タタキ 体内面　ケズリ	黒灰色	硬質	粗		外面ース付着
15	壺	口縁～肩部	11.0	8.6	口縁部は外上方にまっすぐたちあがり、口端部は外面にあまい面を持つ。	口縁部内外面　ナデ 体外面　タタキ 内面　ユビナデ ユビオサエ	淡乳橙色	非常に軟質	やや粗	口縁約1/2 体部約1/4	
16		ほぼ完形	14.2	24.2	口径は体部最大径の3/4弱。やや下膨れ気味の体部を持つ。口縁は屈曲し、口端部は下方にややつまみだして外面に面を持つ。	口縁部内外面　ナデ 体外面　ハケメ 内面　頸部のやや下付近までケズリ	淡乳灰色	やや軟質	やや粗		底部に1cm未満の焼成後の穿孔

番号	器種	部位	法量(cm) 径	現高	形態	調整・文様	色調	焼成	胎土	残存率	備考
17	小型壺	口縁～体部	12.0	7.2	口径と体部最大径はほぼ同じ。 口縁は屈曲してたちあがり、口端部は外面に面を持つ。	口縁部内外面　ナデ 体外面　ハケメ、ヘラミガキ 体内面　ハケメ、ナデ ユビオサエ	灰橙色	普通	やや粗	口縁～体部 約1/5	
18			10.3	7.3	口径は体部最大径の2/3程度。やや内湾気味にたちあがり、端部は丸く収まる。	口縁部内外面　ナデ 体外面　ハケメ 内面　ケズリ	淡乳橙色	硬質	やや粗	口縁 約1/4 体部約1/2弱	体外面ススス付着
19	直口壺	体部		9.3		体外面上半　ヘラミガキ 下半　ケズリのちヘラミガキ 体内面　ユビオサエ ハケメ	暗橙褐色	硬質	良	体部 約1/3	
20		口縁～肩部	13.6	11.35	肩部は張る 口縁部は外上方にまっすぐのび、端部は丸く収める。	口縁部外面　ヨコヘラミガキのちタテヘラミガキ 体外面　ハケメのちヘラミガキ 体内面　板ナデ、ユビオサエ	暗橙褐色	硬質	良	口縁～体部 約1/3	
21		完形	13.0	18.1	肩部から腹部が強く張る。体部に、外上方にのびる口縁部が付く。	口縁部内外面　ヘラミガキのち放射状暗文 体部外面上半　ヘラミガキ 下半　ケズリのちヘラミガキ 体部内面　ハケメ、ナデ	暗橙褐色	硬質	良		
22	複合口縁壺	口縁部	19.4	2.2	凝口縁はやや外反気味にたちあがり、口端部は外面に面を持つ。	内外面　ヨコ方向ナデ	暗茶褐色	硬質	粗		
23	小型壺(精製)	完形	8.0	7.75(全高)	口径と体部最大径はほぼ同じ。 口縁は内湾気味にたちあがり、端部は外方へややつまみだす。	口縁部内外面　ナデ 体外面　タテハケメのち下半はケズリ 体内面　ハケメ、ユビナデ、ユビオサエ	暗淡橙色	普通～やや軟質	やや良		
24		口縁～体部	9.6	9.0	口径と体部最大径はほぼ同じ。 口縁部はやや内湾気味ちあがり、口端部は内側で面を持つ。	口縁部外面　ヨコヘラミガキ 口縁部内面　放射状暗文 体外面上半　ハケメのちヘラミガキ 体外面下半　ケズリのちヘラミガキ	淡橙灰色	やや軟質	良	口縁～約1/3 体部ほぼ残存	口縁部外面ススス付着
25			10.7	9.9	口径は体部最大径より小さい。口縁部は外上にまっすぐたちあがり、口端部は外方にやや肥厚。	口縁～肩部外面　ナデ 口縁部内面　放射状暗文 体外面　ヘラミガキ	淡灰茶色	硬質	良	口縁～体部 約1/3	
26	高坏	坏部	12.8	4.4	椀状の坏部を持つ。 口端部は丸く収める。	外面　ヨコヘラミガキ、下方はタテヘラケズリのちヨコヘラミガキ 内面　ヨコヘラミガキのち放射状暗文	暗淡橙色	硬質	普通		
27		脚部	脚台径 15.0	6.3	短い脚柱部に、大きく拡がる脚台部が付く。	脚柱部外面　ヨコヘラミガキ 内面　ナデ 脚台部外面　ハケのちヨコヘラミガキ 内面　ハケメ	乳白橙色	非常に軟質	やや粗	脚台部 約1/3	

番号	器種	部位	法量(cm) 径	現高	形態	調整・文様	色調	焼成	胎土	残存率	備考
28	高坏	坏部	口径 20.5	5.85	屈曲し外上方へ大きく拡がる。	坏上半部外面 ハケメのちヘラミガキ 坏底部外面 ケズリ 内面 ハケメのち放射状暗文	淡乳橙色	軟質	やや粗	坏部 約1/4	上層と下層で接合
29			口径 22.2	8.55	屈曲し外上方へ伸びる。	坏上半部外面 ヘラミガキ 坏底部外面 ケズリ 体内面 ハケメのち放射状暗文	暗橙褐色	硬質	非常に良	坏部 約1/6	
30			口径 20.8	7.3	坏部は2段に屈曲し、口端部は上方へたちあげ、外面にあまい面をもつ。	坏上半部外面 ハケメのちヘラミガキ 坏底部外面 ケズリのちヘラミガキ 内面 放射状暗文、ヨコヘラミガキ	淡赤橙色	硬質	良		
31			口径 22.4	7.2	坏部は2段に屈曲し、口端部は上方へややたちあげ、外面にあまい面を持つ。	坏上半部外面 ハケメのちヘラミガキ 坏底部外面 ケズリ 内面 ヘラミガキのち放射状暗文	橙褐色	硬質	やや良	坏部 約1/3	
32	小型器台	脚部	脚台径 12.0	3.7		外面 ヨコヘラミガキ 内面 ナデ	淡赤色	軟質	非常に良	脚部 約1/5	脚部穿孔あり
33			脚台径 11.6	6.7		脚部外面 タテヘラミガキのちヨコヘラミガキ 脚部内面 ナデ	淡橙色	硬質	良	脚部 約1/2	
34		坏部	口径 10.0	6.1		坏底部外面 ケズリ 脚柱部外面 ナデ 内面 ケズリのちナデ	暗灰褐色	普通	やや粗	口縁部 約1/3	
35		脚部	脚台径 10.4	7.8	脚部は外方にまっすぐ開く。杯部は内湾気味にたちあがる。	杯部外面 ヘラミガキ 脚部外面 タテヘラミガキのちヨコヘラミガキ 脚部内面 ハケメ	淡橙色	硬質	良	脚部 約1/3	脚部穿孔あり
36		坏部～脚部	脚台径 9.3	5.6	脚部は外側にまっすぐ開く。杯部は内湾気味にたちあがり、口端部はやや上方にたちあげて外面に面をつくる。	杯部外面 ケズリのちヘラミガキ 杯部内面 放射状暗文 脚部外面 ヨコヘラミガキ 内面 ケズリ	橙色	軟質	やや良		脚部穿孔あり 上層と下層で接合
37	山陰系鼓形器台	受部～脚部	9.6	4.4	山陰系の鼓形器台のミニチュア。 受部はやや外反気味にたちあがる。 鋭い陵を持つ。	外面 ヨコ方向ナデ 受部内面 ナナメ～ヨコヘラミガキ 脚部内面 タテヘラミガキ 中軸部内面 ナデ	乳灰白色	やや軟	やや粗		
38		中軸部～脚部		3.2	山陰系の鼓形器台のミニチュア。 鋭い陵を持つ。	外面 調整不明 内面上半 ナデ 下半 ケズリ	淡乳灰色	硬質	粗	約1/3	
39	製塩土器	支脚部	4.4	2.1		調整不明	淡赤橙色	きわめて軟質	非常に粗		
40	高坏			2.45	高坏の坏底部。 周縁部を人為的に打ち欠く。	杯部外面 ヨコヘラミガキ 内面 放射状暗文 脚部外面 タテヘラミガキ	暗灰乳橙色	硬質	やや良	坏底部～脚部	

8、中田遺跡（93-355）の調査

1.調　査　地　　中田１、３丁目

2.調査期間　　平成５年11月12、30日、12月３、６、７、16日

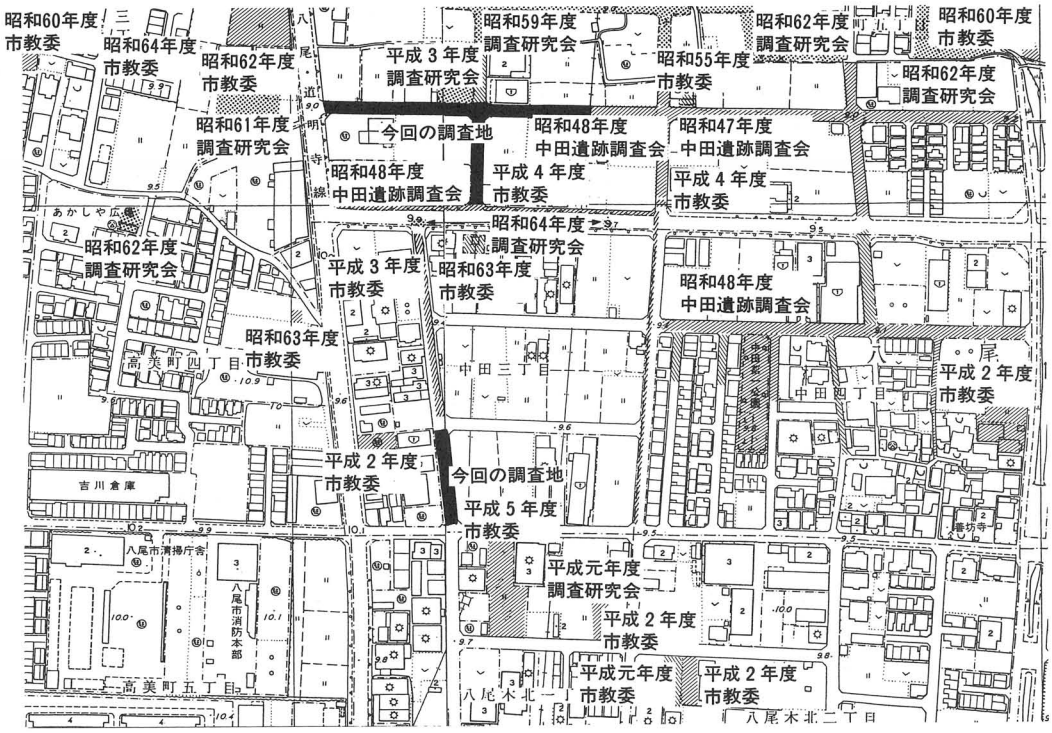
3.調査契機　　公共下水道工事

4.調査方法　　中田１丁目地内については、No2～No7の人孔について、中田３丁目地内については、No9、No10の人孔について、地表下2.5ｍ前後まで重機と人力を併用して掘削。

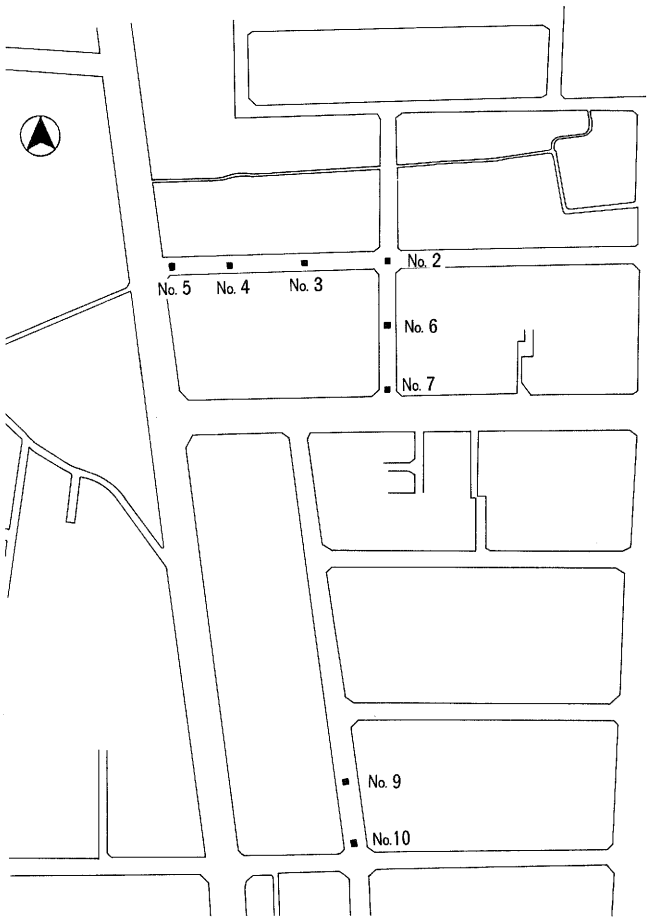
5.調査概要　　〔No5人孔〕東西線の西端の人孔である。地表下1.0ｍ～1.18ｍ（ＴＰ8.35ｍ～8.53ｍ）で古式土師器小片を含む淡茶灰青色粘砂層を確認した。また地表下1.5ｍ以下で灰白色粗砂層を確認している。

〔No4人孔〕地表下2.5ｍまで盛土層であった。

〔No3人孔〕地表下1.3ｍ～1.44ｍ（ＴＰ8.25ｍ～8.2ｍ）で６世紀代の須恵器を含む茶灰褐色炭混粘性砂質土層を確認した。また、No5人孔で確認したのと同様の灰白色粗砂層を、地表下1.8ｍ以下で確認した。



第27図　調査地周辺図（１／５０００）



第28図　調査区設定図（1／5000）

〔No2人孔〕地表下1.5 mまでは、盛土層であった。これより下は地表下2.4 mまで灰白色系の粗砂層であった。

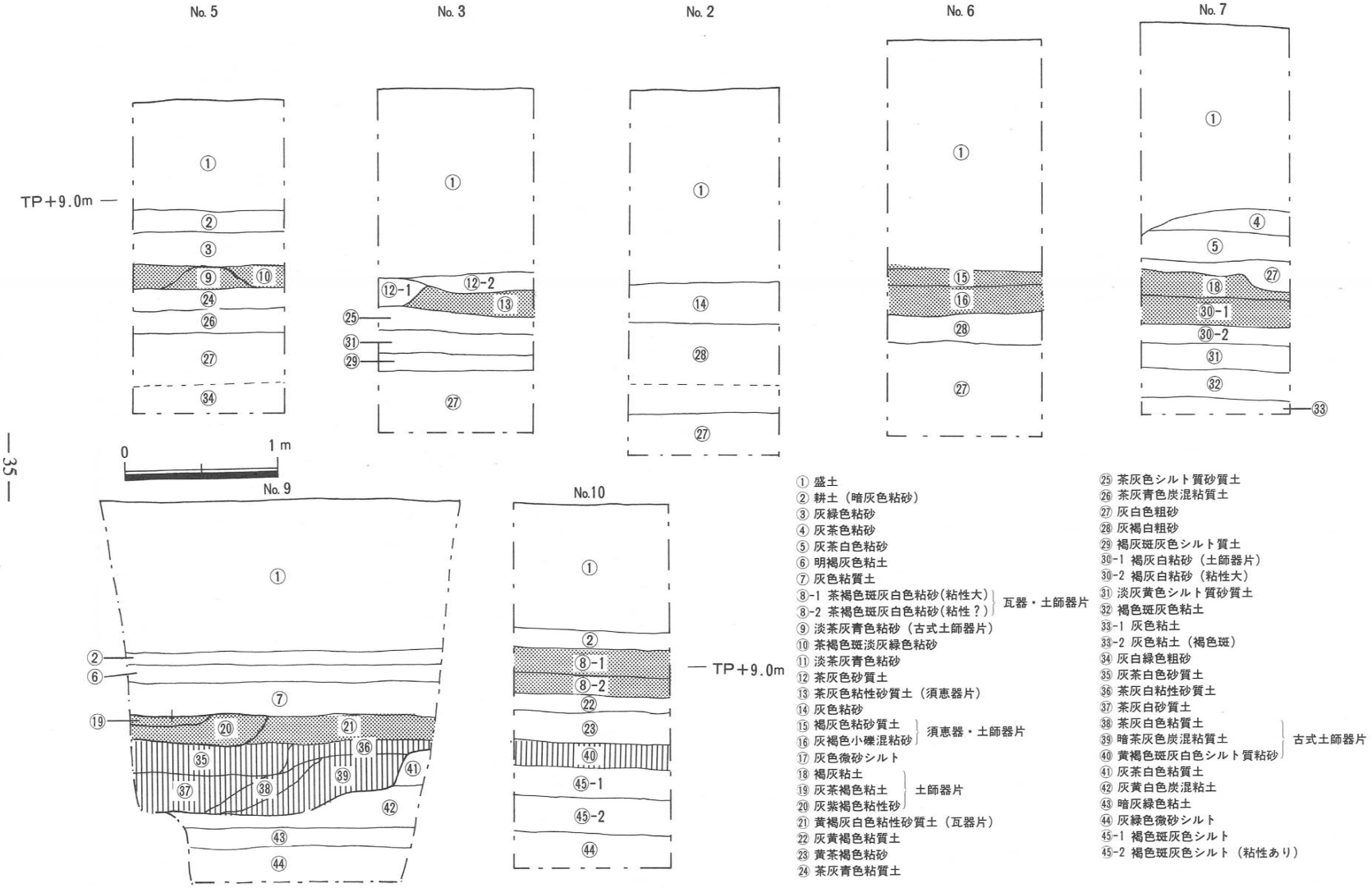
〔No6人孔〕南北線の北側の人孔である。地表下1.44 m～1.74 mで（TP8.48 m～8.18 m）で須恵器、土師器片を含む褐色粘質土層及び褐灰色小礫混粘砂層を確認した。ここでは地表下1.95 m以下で、No2人孔と同様の灰白色粗砂層を確認している。

〔No7人孔〕南北線の南側の人孔である。ここでは盛土層は地表下1.2までに留まり、比較的、旧の地層の残りが良かった。地表下1.3 m～1.5 m（TP8.78 m～8.58 m）で瓦器片、土師器片を含む灰茶白色粘砂層を確認している。また、この下の地表下1.58 m～1.9 m（TP8.5 m～8.18 m）で土師器片を含む褐色粘土層及び褐灰白色粘砂層を確認した。

〔No9人孔〕中田3丁目地内の南北線の交差点の南側の人孔である。地表下1.36 m～1.52 m（TP8.78 m～8.62 m）で瓦器片、土師器小片を含む黄灰褐白色粘性砂質土層を確認した。またこの層をきりこむ土坑状の遺構を確認している。この下の地表下1.52 m～2.0 m（TP8.62 m～8.14 m）では、灰茶白色粘質土層をきりこむ土壙状遺構を断面で検出した。埋土には庄内式土器小片が含まれている。

6.まとめ

中田1丁目地内では、古墳時代後期の包含層の拡がりをある程度確認できたが、庄内式期のそれははっきりとは捉えることができなかった。No2人孔で確認した粗砂層は、東側でも確認されており、幅60m以上の自然河川があったようである。青山町3丁目地内でも確認されており、これとつながってくる可能性がある。（吉田）



① 盛土
② 耕土（暗灰色粘砂）
③ 灰緑色粘砂
④ 灰茶色粘砂
⑤ 灰茶白色粘砂
⑥ 明褐灰色粘土
⑦ 灰色粘質土
⑧-1 茶褐色斑灰白色粘砂(粘性大)
⑧-2 茶褐色斑灰白色粘砂(粘性？)
瓦器・土師器片
⑨ 淡茶灰青色粘砂（古式土師器片）
⑩ 茶褐色斑淡灰緑色粘砂
⑪ 淡茶灰青色粘砂
⑫ 茶灰色砂質土
⑬ 茶灰色粘性砂質土（須恵器片）
⑭ 灰色粘砂
⑮ 褐灰色粘砂質土
⑯ 灰褐色小礫混粘砂
須恵器・土師器片
⑰ 灰色微砂シルト
⑱ 褐灰粘土
⑲ 灰茶褐色粘土
⑳ 灰紫褐色粘性砂
土師器片
㉑ 黄褐灰白色粘性砂質土（瓦器片）
㉒ 灰黄褐色粘質土
㉓ 黄茶褐色粘砂
㉔ 茶灰青色粘質土
㉕ 茶灰色シルト質砂質土
㉖ 茶灰青色炭混粘質土
㉗ 灰白色粗砂
㉘ 灰褐白粗砂
㉙ 褐灰斑灰色シルト質土
㉚-1 褐灰白粘砂（土師器片）
㉚-2 褐灰白粘砂（粘性大）
㉛ 淡灰黄色シルト質砂質土
㉜ 褐色斑灰色粘土
㉝-1 灰色粘土
㉝-2 灰色粘土（褐色斑）
㉞ 灰白緑色粗砂
㉟ 灰茶白色砂質土
㊱ 茶灰白粘性砂質土
㊲ 茶灰白砂質土
㊳ 茶灰白色粘質土
㊴ 暗茶灰色炭混粘質土
㊵ 黄褐色斑灰白色シルト質粘砂
古式土師器片
㊶ 灰茶白色粘質土
㊷ 灰黄白色炭混粘土
㊸ 暗灰緑色粘土
㊹ 灰緑色微砂シルト
㊺-1 褐色斑灰色シルト
㊺-2 褐色斑灰色シルト（粘性あり）

第29図　各調査区土層断面柱状図（１／４０）

9、西郡廃寺（92-414）の調査

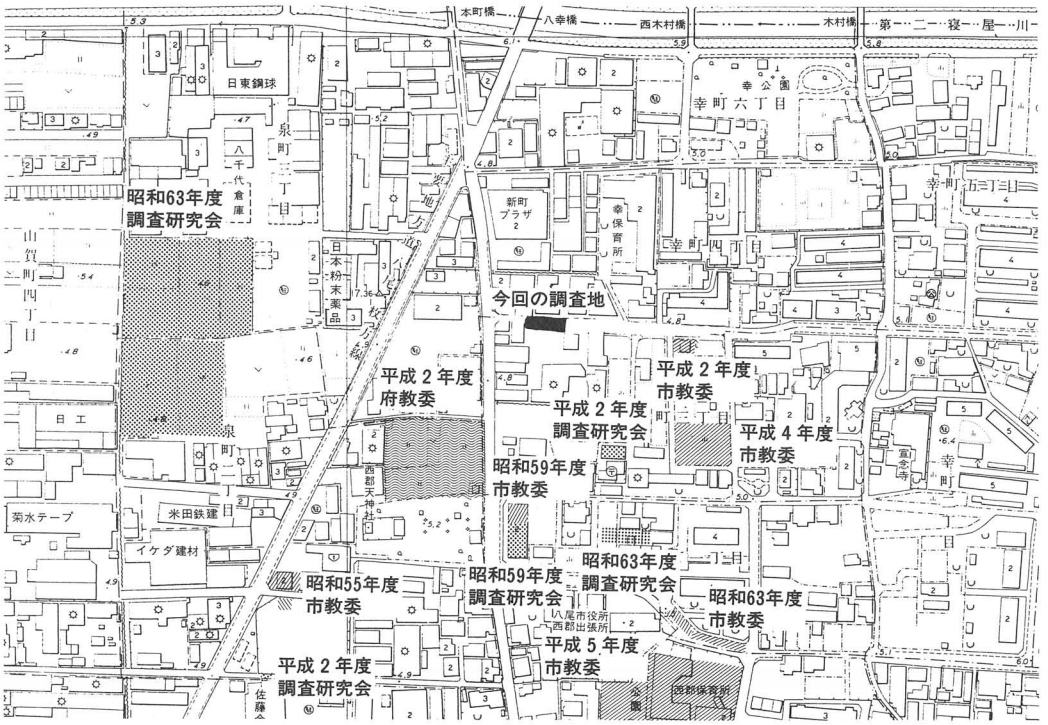
1.調　査　地　　幸町３丁目～４丁目

2.調査期間　　平成５年１月22日

3.調査契機　　公共下水道工事

4.調査方法　　下水道工事の人孔部分（2.4 m×2.4 m）を対象として地表下2.2 m前後まで掘削、調査を実施した。

5.基本層序　　既に水道管やガス管が埋設されており、0.7 ～0.95 mは攪乱されている。しかしＧＬ－0.45 m付近に一部旧耕作土が残存していた。遺物包含層はＧＬ－0.85 m前後の灰黒色粘砂で平安時代前半期の遺物が出土しており、この下部の暗黄緑灰色微砂質土～シルトが第１遺構面となる。第１遺構面のベースからは須恵器の甕・蓋杯、土師器などの砕片が出土している。そしてＧＬ－1.2 m前後の暗褐灰色微砂質土～淡緑灰色砂質土が第２遺構面になる。第２遺構面ベースからも須恵器・土師器の砕片を若干出土し、ＧＬ－1.45 m前後の淡灰褐色粘土～暗褐灰色粘土が第３遺構面となる。ＧＬ－1.75 m前後以下には



第30図　調査地周辺図（１／５０００）

淡黄褐色粘質シルト、暗灰色粘土がみられるが遺物等は確認していない。

6.遺構・遺物　〔第1遺構面〕ピット2基と土坑2基、溝1条を検出した。また北壁断面で未検出の土坑2基を確認した。

ＳＰ 1 －径0.35～0.45 m楕円形・深さ0.08 m・埋土＝暗灰色粘質土

2 －径0.45 mの円形・深さ0.14 m・埋土＝暗灰色粘土、須恵器片出土

ＳＫ 1 －0.55 m以上×0.33 m以上の方形あるいは長方形・深さ0.17 m・埋土＝暗灰色粘砂

2 －0.65m×0.5 m以上の方形あるい長方形・深さ0.13 m・埋土＝暗淡緑灰色粘質土

3 －断面で検出・径0.65 m・埋土＝暗灰緑色粘砂

4 －断面で検出・径0.55 m・埋土＝暗茶灰色粘砂

ＳＤ 1 －検出長1.4 m・深さ0.09 m・埋土＝暗灰色粘砂、磨耗している杯Ｈの蓋片出土

〔第2遺構面〕ピット1基と土坑1基を検出した。

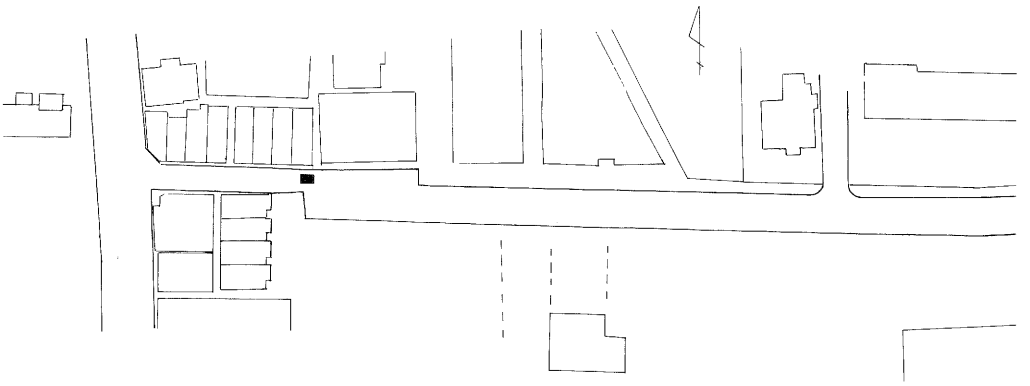
ＳＰ 3 －0.45 m×0.41 mの不整円形・深さ0.06 m・埋土＝暗灰色粘砂

ＳＫ 5 －径0.65 m以上の円形あるいは不整円形・深さ0.26 m・埋土＝暗灰色粘砂、杯Ｈの蓋出土

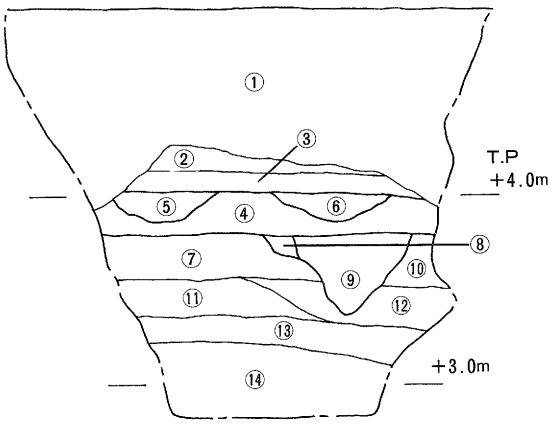
〔第3遺構面〕ピット1基を検出した。ピットには柱痕が確認された。

ＳＰ 4 －径0.35 mの円形・深さ0.25 m・埋土＝暗褐灰色粘砂・柱痕0.17 m遺物は出土していない。

7.備　　考　西郡廃寺は天神社の北方約百m付近の小字「八角堂」から出土したと伝えられる塔心礎やこれまで見つかっている瓦類などから8世紀初頭には建立されていたと推定され、また鎌倉時代の土器や瓦が出土していることからその時期まで何らかの形で存続していたことが伺える。その伽藍配置などは明らかになっていないが、昭和59年度に(財)八尾市文化財調査研究会によって本調査地より南へ20 mの地点で調査が実施され、奈良時代の土器を多量に含む土坑が検出され包含層から多くの瓦が出土している。また平安時代末期から鎌倉時代末期の井戸や土坑、多数の柱穴が検出され、その存在の可能性が高まった。今回は奈良時代に遡る遺構は検出できなかったが、その僅かな調査面積のなかで中世の遺構が検出できたことは前述の調査との位置関係から重要な意味を持つものと思われる。（渕）

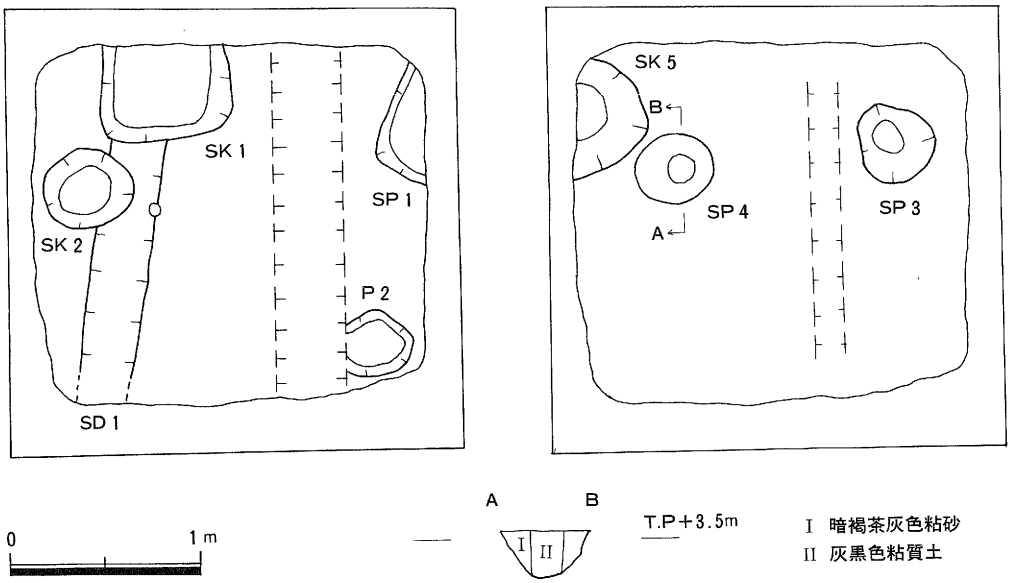


第31図　調査設定図（１／１２００）



① 盛土
② 暗灰色砂質土
③ 灰黒色粘土
④ 暗黄緑灰色微砂質土
⑤ 暗茶灰色粘砂（SK３）
⑥ 暗灰緑色粘砂（SK４）
⑦ 暗褐灰色微砂質土
⑧ 暗褐灰色粘土
⑨ 暗灰色粘砂
⑩ 淡緑灰色砂質土
⑪ 淡褐灰色粘土
⑫ 暗褐灰色粘土
⑬ 淡黄褐色粘質シルト
⑭ 暗灰色粘土

第32図　北壁断面図（１／４０）



第33図　調査区平面図（１／４０）及びSP４断面図（１／４０）

１０．郡川遺跡（93-336）の調査

1.調　査　地　郡川１丁目19．10

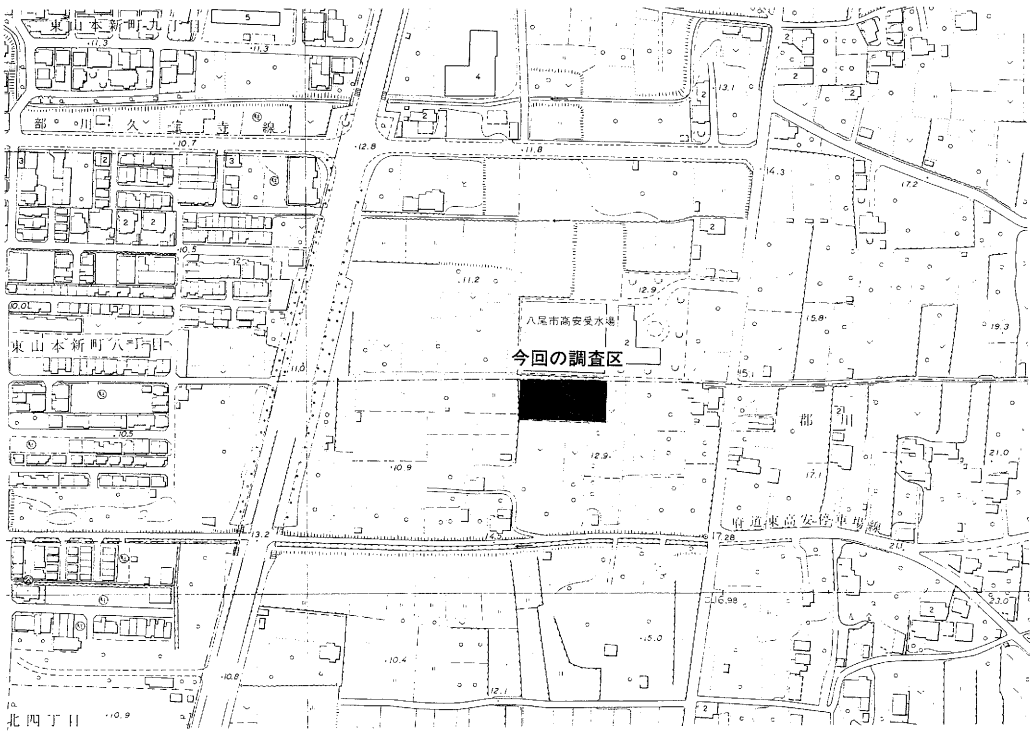
2.調査期間　平成５年10月４、５日

3.調査契機　受水池増築

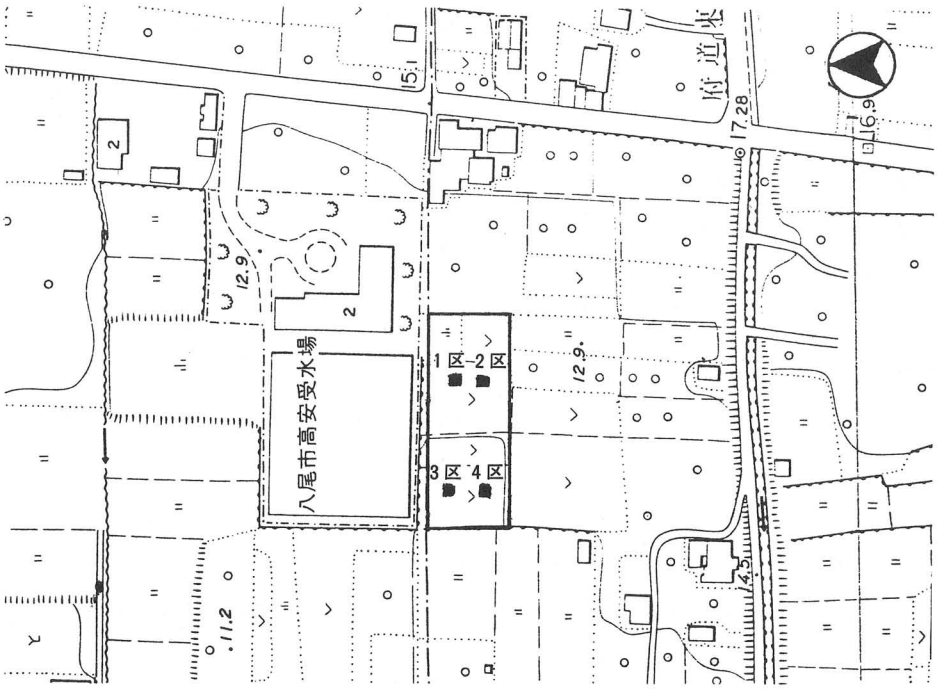
4.調査方法　３m×３mの調査区を４ヵ所設定し、各々２～３mまで掘削し、調査を実施した。第１・２区と第３・４区とは約0.65～0.7 mの高低差がある。

5.基本層序　第１・２区－いずれも地表下１～1.1 m（ＯＰ＋12.63～12.53 m）にある⑦層暗茶灰色粘砂上面で弥生時代後期の甕の底部、壺口縁部、石器等が出土している。また１区では⑦層上面で流路を検出している。

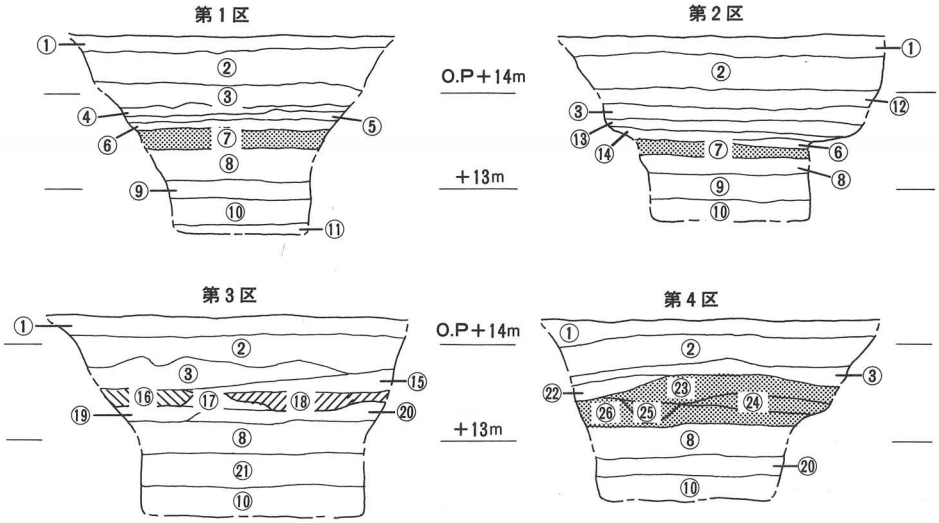
第３・４区－第３区では地表下0.6～0.7 m（ＯＰ＋13.6～13.7 m）の⑰層灰色粗砂質土上面が弥生時代後期の遺構面となる。第４区では第３区のような遺構は確認できなかったが㉒・㉓・㉕層で弥生時代後期の遺物に混じって縄文時代後期の土器片が出土している。



第34図　調査地周辺図（１／５０００）

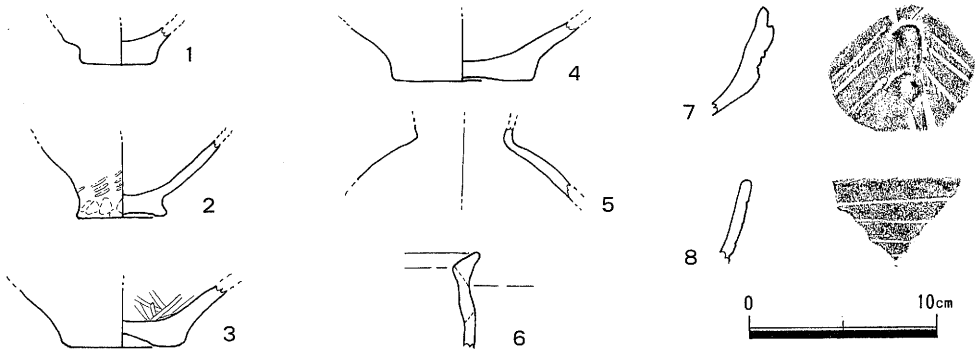


第35図　調査区設定図（1／1250）



① 耕作土
② 淡褐色砂質土
③ 暗淡褐色砂質土
④ 褐色シルト
⑤ 淡茶灰色粘砂
⑥ 灰白色細砂
⑦ 暗茶灰色粘砂
⑧ 暗灰色礫混粘砂
⑨ 灰色砂礫
⑩ 黒灰色粘土
⑪ 黒灰色礫混粘砂
⑫ 淡褐色粘砂
⑬ 暗褐色礫混砂質土
⑭ 暗褐色砂質土
⑮ 暗黄灰色砂質土
⑯ 灰黒色粘砂
⑰ 灰色粗砂
⑱ 灰黒色粘砂（植物遺体）
⑲ 灰褐色粘質土
⑳ 灰色砂質土
㉑ 淡灰色微砂質土
㉒ 暗褐色粘砂
㉓ 淡灰色粗砂質土
㉔ 淡灰色細砂
㉕ 暗青灰色礫混粘砂
㉖ 淡灰色砂礫

第36図　土層断面図（1／80）



第37図　出土遺物実測図（1／4）

6.遺 構・遺 物　第1区ー西側、⑦層上面で南北に伸びる流路を検出した。淡黄灰色細砂を埋土とし、古墳時代の遺物が若干出土している。

第3区ー⑰層上面で東西に伸びる溝と調査区東端で溝状の落ち込みの肩を検出した。東西に伸びる溝は最大幅0.8 m、深さ0.28 mを測り、埋土は⑯層灰黒色粘砂で弥生時代後期の遺物が多く出土している。また溝状の落ち込みの埋土である⑱層灰黄色粘砂には炭化物が多く含まれている。

第37図では(1)壺底部、(2)甕底部、(5)壺体部、(8)鉢が第3区の溝からの出土遺物である。(2)の甕はタタキを施した後ナデによりそれを消している。(7)は⑰層出土の縄文時代後期の宮滝式の深鉢片とみられる。(3)広口壺底部は第1区の(6)層上面で出土している。(6)小型鉢は第2区の⑦層で出土している。(3)は外面をナデ、内面はヘラミガキを施している。⑥は全体にナデ調整のみが行われ、分割成形の痕跡が明瞭にわかる。

7.備　　考　今回の調査では弥生時代後期の遺物が良好な状態で遺存していることが確認できた。調査地の南側はかつて郡川西塚・郡川東塚古墳が存在しており、また東側には奈良時代の高麗寺跡がある。調査ではそれらと同時期の遺構は検出できなったが、山麓部での弥生時代後期の集落の拡がりを確認することができた。（渕）

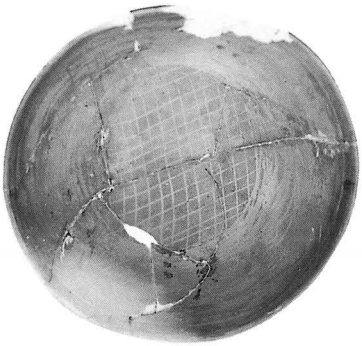
報告書抄録

ふりがな	やおしないいせき　へいせい5ねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	八尾市内遺跡 平成５年度発掘調査報告書II
副書名	平成５年度公共事業
巻次	
シリーズ名	八尾市文化財調査報告
シリーズ番号	30
編著者名	消斎・吉田野乃
編集機関	八尾市教育委員会
所在地	〒581　大阪府八尾市本町１丁目１番１号　TEL0729－91－3881
発行年月日	西暦　1994年　３月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
跡部遺跡	大阪府　八尾市 春日町	27212		34° 36′ 50″	135° 35′ 25″	19930419	9.0	公共下水道工事に伴う遺構確認調査
萱振遺跡	八尾市　桂町	27212		34° 38′ 20″	135° 36′ 30″	19930812,13, 19930818,19	25.0	保育所建設に伴う遺構確認調査
小阪合遺跡	八尾市　小阪合	27212		34°	135°	19930826	10.0	小学校屋内運動場建設に伴う遺構確認調査
				37′ 15″	37′ 00″	19931110,12	28.0	市民体育館建設に伴う遺構確認調査
東郷遺跡	八尾市　東本町	27212		34° 37′ 40″	135° 36′ 25″	19931018～ 19931023	63.0	道路築造に伴う遺構確認調査
中田遺跡	八尾市　中田	27212		34° 36′ 45″	135° 37′ 10″	19930311,12,16 19931013～1993 1016, 199311221 9931112,30, 19931203,6,7, 16	16.0 20.0 32.0	公共下水道工事に伴う遺構確認調査
西郡廃寺	八尾市　幸町	27212		34° 38′ 45″	135° 36′ 05″	19940122	6.0	公共下水道工事に伴う遺構確認調査
郡川遺跡	八尾市　郡川	27212		34° 37′ 00″	135° 38′ 20″	19931004,5	36.0	受水池増築に伴う遺構確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
跡部遺跡	集落	弥生時代		弥生土器	
萱振遺跡	集落	古墳時代 中世	土壙、ピット 土壙、溝	土師器 瓦器、土師器	
小阪合遺跡	生産遺跡	古墳時代 奈良～平安時代	水田（畦畔、足跡）	土師器 土師器、須恵器	
東郷遺跡	集落 生産遺跡	弥生時代 近世 近世	ピット 土壙、溝 畝状遺構	弥生土器 近世陶磁、瓦、瓦質土器 近世陶磁器	
中田遺跡	集落	古墳時代 中世	土壙 井戸	土師器、須恵器 瓦器、須恵器、土師器、瓦	
西郡廃寺	寺院	平安～鎌倉時代	土壙、ピット、溝	土師器、須恵器	
郡川遺跡	集落	弥生時代	溝	弥生土器	

図　　版



1　上から

2　上から

1

2

3　上から

4　上から

3

4

出土遺物

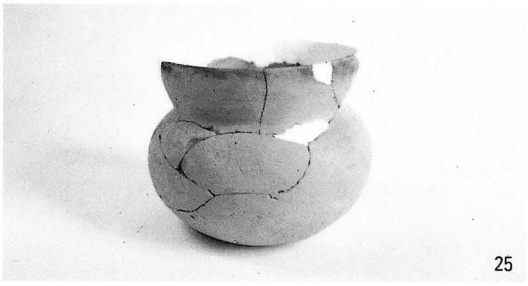
図版2　中田遺跡（93－289）

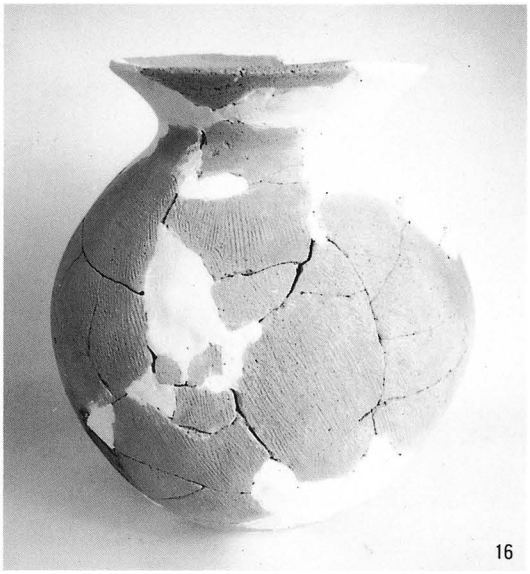
33

34

21

22

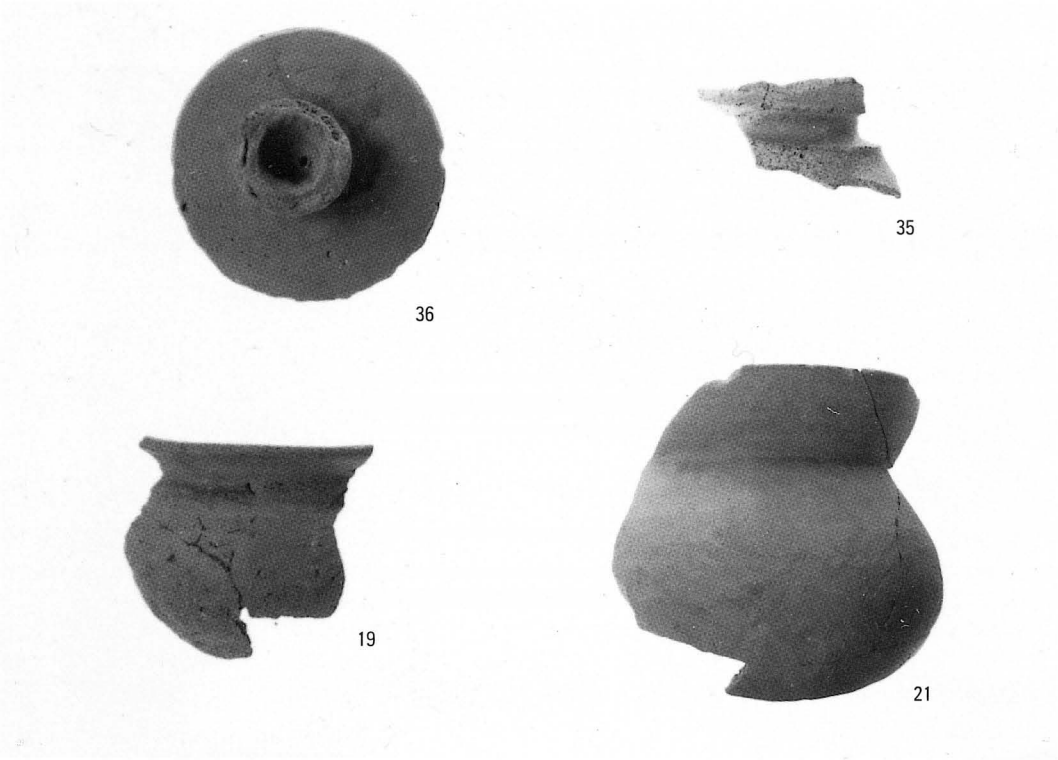

25


16

14

出土遺物

図版3　中田遺跡（93－289）



出土遺物

八尾市文化財調査報告30
平成５年度　公 共 事 業

八尾市内遺跡平成５年度発掘調査報告書Ⅱ

発　行　日　　１９９４年３月
発　行　所　　八尾市教育委員会
印　　刷　　㈱コーヨー２１